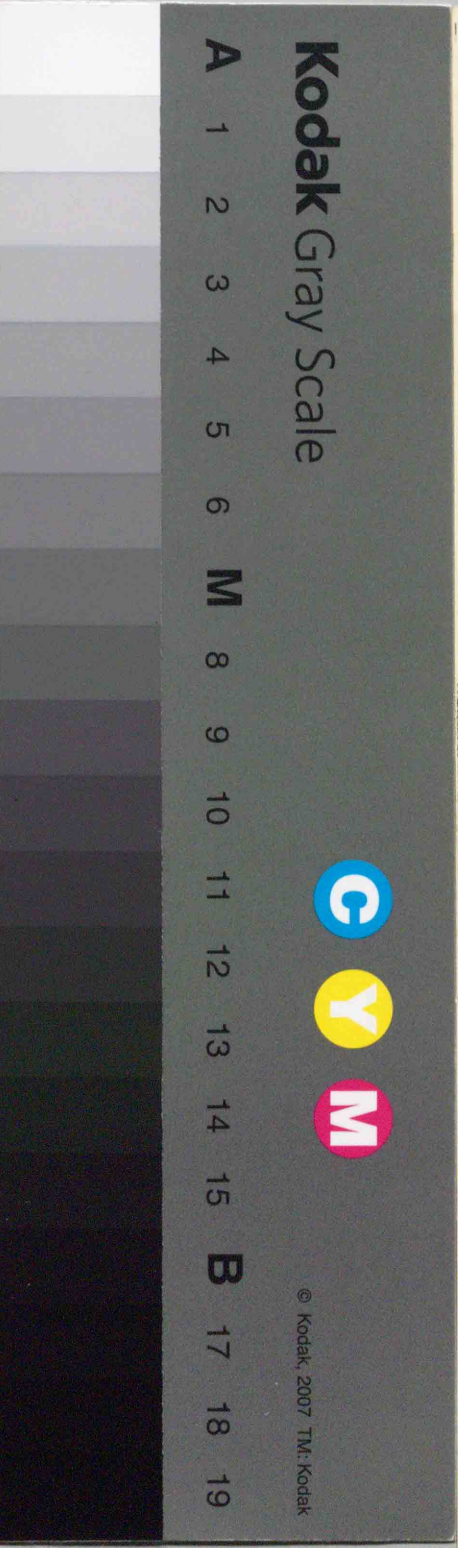
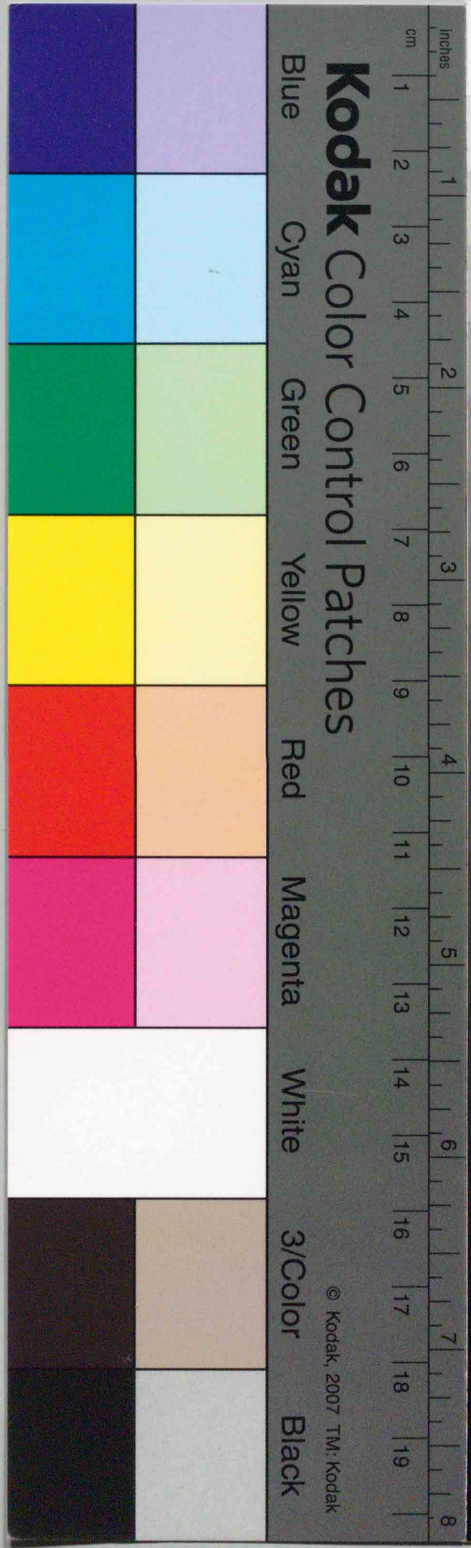
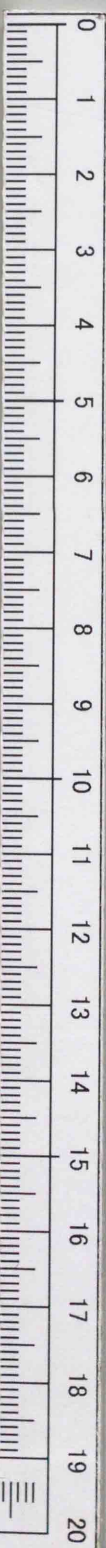


訂改
帝國新讀本
卷四

375.9
Ha7
資料室

觀
中
教
科
書
協
會



41672

教科書文庫

4
F10
41-1927
200030
1523



資料室

文部省檢定

中學國語科

昭和二年十月二十七日

375.9

H27

文學博士芳賀矢一編

改訂
帝國新讀本

東京

合資
會社

富山房發兌



子太皇德聖人哲 二三

繪作英田和 子太德聖



訂改 帝國新讀本 卷四目次

一 四方の海(明治天皇御製).....	一
二 明治天皇の御製について.....	四
三 トラファルガルの海戦.....	八
小笠原長生.....	八
名將と凡將(自修文).....	一六
三宅雪嶺.....	一六
四 月光と古人.....	三
一 菅公.....	三
二 安倍仲麿.....	三五
五 健康な秋の大地.....	三九
川路柳虹.....	三九
六 植物と氣象との關係.....	三六
三 好學.....	三六
七 「鷹が渡る」.....	四七
野村傳四.....	四七

八 晩秋の草と蟲……………若山牧水…三五

九 妙義山……………河東碧梧桐…五七

一〇 夕もやの野……………中西悟堂…六四

一 冬枯の大井川……………千葉龜雄…六六

二 本居翁の遺蹟……………柴田鳩翁…八〇

三 心の洗濯(自修文)……………落合直文…八四

三 鐘聲……………坪内逍遙…八五

四 讀書……………幸田露伴…九〇

五 樂地……………橘曙覽…九四

六 蛙物語……………山岡元隣…九六

七 我が家の富……………徳富健次郎…九六

八 枯林……………吉江喬松…一〇二

△一九 清淨の國……………大町桂月…一〇八

二〇 國歌の話……………夏目漱石…一二〇

元 日自修文……………元 日自修文…一二〇

二 祖先を崇び家名を重んず……………石川雅望…一二四

三 富士の山(狂歌)……………石川雅望…一二四

△三 しみのすみか……………石川雅望…一二四

一 白髪三千丈……………一三四

二 星……………一三五

三 茗荷……………一三六

四 桶屋の思案……………一三七

二四 雪……………一四一

二五 樹木の言葉……………島崎藤村…一四四

雪と霞(自修文)……………薄田泣菫…一五一

三 本多重次……………新井白石…二五

七 土器賣る翁……………柳澤淇園…二六

六 武藏野の二月……………中西悟堂…二六

元 春を待つ歌……………(高等小學讀本)…二七

三 自然の神秘……………吉田絃二郎…二七

俳句評釋(自修文)……………沼波瓊音…二七

三 靜かな春……………生田春月…二八

三 哲人聖德皇太子……………高島米峰…二八

三 飯の味……………相馬御風…二九

三 造化のたくみ……………土井晚翠…二九

改訂帝國新讀本 卷四

一 四方の海 (明治天皇御製)

四方の海みなはらからと思ふ世に
など波風の立ちさわぐらん

かし原のとほつ御祖の宮ばしら
たてそめしより國は動かす

照るにつけ曇るにつけて思ふかな
わが民草のうへはいかにと

民草

一 四方の海

予らはみな軍のにはに出ではてて

おきなやひとり山田もるらん

世とともに語りつたへよ國のため

いのちを捨てし人のいさをを

政いでて聽く間はかくばかり

あつき日としも思はざりしを

よりそはんひまはなくとも文机の

上には塵をすゑすもあらなん

さし昇る朝日の如くさわやかに

もたまほしきは心なりけり

家とみてあかぬことなき身なりとも

ひとのつとめにおこたるなゆめ

おのがじし

おのがじし務ををへし後にこそ

花のかげには立つべかりけれ

おのが身を修むる道は學ばなん

賤がなりはひいとまなくとも

なりはひ

とこしへに民やすかれと祈るなる

わがよをまもれ伊勢のおほ神

を拜誦し奉るものは、一言一句、これが即ち萬機親裁の餘、御
寛ぎあそばされた御日常の御慰安であつたことを拜察し
なければならぬ。

日常の御慰安の爲にお詠みあそばされた數々の御詠、そ
の風調は高く、規模は大きく、いかにも萬世一系の帝祚を踐
ませ給ふ上御一人の御作と窺はれる。國を思ひ、民を憐ませ
給ふ大御心は、常に御製の上に現れてゐる。一首の歌が米國
大統領ルーズベルト氏を動かして、講和仲裁に盡力させる
動機となつたといふ御逸話の如きは、三十一文字の和歌が、
千萬の兵馬にも勝れた力を示したもので、和歌始つて以來
未曾有なことである。まして七千萬の國民が日常拜誦して、

風調
上御一人

〔Roosevelt〕
第二十六代、
第二十七代の大
統領、西暦一
八五八年―一
九一九年〕
動機

自然に蒙る偉大な感化に至つては、何等の經典もこれに並
ぶものはない。日々の御慰が直ちに國民教化の源泉となる、
これほどの貴さが、いつの世、どこの國にあらうか。

明治時代の詔勅は森嚴雄大、永く國史を照らして、後世の
國民に聖代を語り、典範を示すのである。しかし、詔勅にはそ
れぞれの形式があり、聖意を承けて起草する人のあること
も明白である。御製は直ちに大御心から發したもので、これ
を拜誦するものは、即ち直接に玉の御聲を拜聽するのであ
る。草莽の微臣まで、日々玉の御聲を拜聽する光榮を有する
のは、實に我が國民の特殊な幸福である。

典範
起草す

玉の御聲
草莽の微臣

震懾屏息

⁽¹⁾Boulogne.
フランスの北
部イギリス海
峽に臨んだ海
港。虚に乗ず

三 トラファールガルの海戦 小笠原長生
ナポレオン一世身を陸軍の一將校より起して、忽ち佛國の帝位を踐み、四方を制壓して天下を睥睨するや、列國の群雄皆震懾屏息して、その部下に屬せしが、ひとり英國のみは孤立を守りて敢へて屈せず、その島國たるを利用して、優勢なる海軍を備へ、海上の權力を握りて、屢佛軍を惱ましたり。ここに於てナポレオンは畢生の力をつくし、雄兵十五萬を⁽²⁾ブローニユに集め、船舶二千五百餘隻を海岸に浮かべ、まづ艦隊を四方に分ち、以て英國艦隊を他に導き、その虚に乗じて陸兵の大輸送を行ひ、二十餘海里の海峡を一躍して英

粉碎す

猖獗

天職

國を粉碎せんとせり。

英國の海軍提督ネルソンは、豫てよりナポレオンの猖獗を制し、歐洲人民に自由を與ふるを以て、己の天職なりと確



ンオレボナ

信しゐたりしが、今ナポレオン大舉して英國を侵略せんとすと聞き、佛帝たとひ鬼神の術ありとも、その海岸を距る一海里の外に出でしめじ。といひて、

直ちに敵の艦隊を追尾して、カヂス港の附近に到りぬ。時に佛國の提督⁽³⁾ビールヌーブ、スペイン艦隊と相合し、四十餘隻の軍艦を督し、死を決して英國艦隊と戦ふ用意をなせり。ネルソンこれを覺り、三十餘隻の軍艦を率ゐ、進みてトラファ

⁽¹⁾Cádiz.
スペイン南部の海港。トラファールガル岬はその南方に在る。
⁽²⁾Villeneuve.
西曆一七六三年一月一八〇六年。
⁽³⁾Spain.
西班牙

(一)光格天皇の文
化二年。

ルガル岬の邊に達し、遂に敵の隊と相會す。時に西曆一千八百五十年十月二十一日なり。

(二)Collingwood,
(西曆一七五〇年)

ネルソン敵の横陣を布くを見て、喜色面に溢れ、總艦隊を分ちて二隊の縦陣とし、副提督コリングウッドをしてその一隊を指揮せしめ、風下に方れる敵の後殿艦より第十二位に列せる艦の間に進入すべきを命じ、自らは他の艦隊を率ゐ、敵陣の中央を突貫して、まづその一部を撃破せんとせしが、佛將ビールヌーブこれを察し、その艦隊を二列に排布し、前隊各艦の間に當る點に後隊の各艦を列せしめ、相依りて空隙なからしめぬ。

(三)Victory.

時に英國艦隊の旗艦ビクトリー號の上甲板に佇立せる

(四)Blackwood,
(西曆一七七〇年)

ネルソン、傍なるブラックウッドを顧て、「君は幾何の敵艦を捕獲せば、我が勝戦なることを是認すべきか。」と問ふ。ブラックウッド「十五隻を捕獲せば以て偉功となすに足らん。」と答ふ。ネルソン頭を振り、「否、吾は二十隻を捕獲するにあらずば、満足すること能はざるべし。」といふ。やがてその室に赴き、正装して燦爛たる數個の勳章を胸間に懸け、肅然として天に向かひ、「神よ、願はくは我が英國に赫々たる大勝を授け、全歐洲の人民をその塗炭の苦みより救ひ給へ。願はくは我が將卒をして一人も卑怯の舉動をなすものなからしめ給へ。併せ願はくは戦勝後我が軍の事を處する、一に仁慈を以てせしめよ。ネルソンの一身は固より惜しむに足らず。たゞ我が

塗炭の苦み

忠誠を憐みて、擁護を垂れ給へ。」と祈りて、やがて甲板に出でたるに、敵艦愈、近づく。英軍の意氣益、壯なり。ネルソンまたブラックウッドを顧て、「なほ一信號旗の掲げざるべからざるものあり。」とて、直ちに信號兵に令し、信號旗を檣頭に掲げしむ。

その信號は、「英國は各自がその本分をつくさんことを期待す。」といふことなり。英國總艦隊これを望みて、狂喜措くこと能はず、拍手喝采の聲、海波も爲に震はんとす。ネルソン莞爾として、「今ははや準備に於て遺憾なし。餘はたゞ神と我が正義とを頼まんのみ。」といひしが、やがて「接戦せよ。」との信號旗は、檣頭高く掲げられたり。



戦海のルガルトラト

意氣軒昂
眉宇の間に
溢る

Royal
Sovereign.

Santa
Anna.

旗艦ビクトリー號、前驅率先して進みしが、着弾距離に達するや、數隻の敵艦これに向かひて砲撃を始め、飛弾交、ネルソンの頭上に轟く。ブラックウッドその本艦に還らんとして、ネルソンと握手しつゝ、「余はまた速に本艦に來りて、敵艦二十隻を捕獲せる閣下の壯貌を拜すべし。」といへば、ネルソン、「我はすでに國家の爲に一身を犠牲にせんとせり。再び相語ることを期せず。」といふ。意氣軒昂、爽快の色その眉宇の間に溢れたり。

時に副提督コリングウッドの旗艦ロイヤルソブリン號は、その艦隊の先頭に立ちて、健帆風を孕みて、スペインの戦艦サンタ・アナ號に向かひて進みしが、その艦尾に達する

好丈夫

索具

看破す

や、二弾を重填せる左舷の大砲を一齊に發射し、忽ちこれを撃破せり。ネルソン遙かにこれを望み、欣然として左右を顧つ、好丈夫の意氣を見よ。壯烈鬼神の如し。といふ。すでにして佛の諸艦皆ビクトリー號を目がけて進み來りしかば、飛彈實に急雨の如く、艦體破壊し、索具斷絶し、兵士の戰死するもの頗る多し。然れどもなほ堅く忍びて一發も應砲せず、益進みて佛の提督ピールムーブの旗艦を索む。ピールムーブこれを避けんが爲、殊更に將旗を掲げざりしかど、ネルソンその陣形によりて、旗艦の第二位にあることを看破し、猛然これに薄り、まづ艦窓に向かひて小銃五百の一齊射撃を行ひ、續いて三弾を重填せる左舷の大砲を一時に發射せり。波

毀損す

Redoubtable.

濤驚き、雲霧裂け、その音百雷の一時に落つるが如く、敵兵四百、算を亂して斃れ、二十門の巨砲毀損し、艦體大破して、また用ふること能はざるに至れり。



ネルソン

ここにネルソン愈奮戰して進み、右舷の諸砲を以て別に敵艦レゾータブル號を砲撃しつ、遂にこれに衝突せり。この時に當り、英の諸艦長各猛進して佛艦と接戦し、兩軍の戰正に酣にして、奮闘殆ど一時間ならんとするをりしも、レゾータブル號の檣樓より一發の銃丸飛來りしが、甲板上を急走せるネルソンの肩に中りて、これを倒したり。衆駭きて相集り、直ちにネルソンを扶け起し

Hardy.

沮喪す

ぬ。ネルソン、艦長ハーヂーを見て、「佛奴我を狙撃し、彈丸我が脊髓を貫けり。恐らくはまた起つ能はざるべし。」といふ。かくてネルソンは、我が負傷の一事、徒に兵氣を沮喪せしむることあらんとて、徐に手巾を出し、我が面部と勳章とを蔽ひ、擔はれて治療室に入りぬ。時にレゾータブル號の兵士、艦上に襲撃隊を組み、將に突入し來らんとす。英兵急に小銃を亂射してこれを却け、なほ大小砲を連發してその過半を斃ししかば、彼等は力竭きて終に降伏せしが、續いて敵艦のその旗章を下して降を乞ふもの引きも切らず。ビクトリーの兵士、拍手歡呼して聲雷の如し。ネルソン治療室にありてこれを聞き、思はず微笑せり。

ハーヂーたまたまネルソンの傍に來り、「捕獲の敵艦十二隻に下らず。」といへるに、ネルソン「我が艦の敵に降れるものなきか。」と問ふ。ハーヂー聲に應じて、「一隻もなし。」と答ふ。ハーヂーやがて甲板に上り、一時間を経ずして再び訪來れるに、ネルソンその艦隊をして投錨せしめんと、の念切なりしかば、これをハーヂーに命ず。ハーヂー「艦隊の運命は副提督コリングウードの指導に任せ給へ。」といひしに、ネルソン頭を振り、「苟も我が殘喘をほ存する間は、何ぞ指導の權を他人に委せん。」といふ。

すでにして薄暮に至り、佛、西兩國の聯合艦隊大敗して、砲聲全く収り、ネルソンの氣息もまた奄々たり。左右口をその

氣息奄々

殘喘なほ存す

耳朶にあてて、全勝我が軍に歸し、敵艦二十隻を捕獲せり。」と報ぜしに、ネルソン莞爾として遂に瞑せり。——帝國海軍史論——

名將と凡將〔自修文〕

三宅雪嶺

(一)文學博士。名は維二郎。雪嶺はその號。評論家。

猪突猛進
まつしぐらに突進む。

(二)初名長尾虎。雅量して不識。後上杉謙信と稱し、輝に謀して利を名。天正六年(一六二八年)歿。天正六年(一六二八年)歿。天正六年(一六二八年)歿。



上杉謙信

名將と凡將との差は、戰略戰術に通じてゐると否とよりも、寧ろ頃合を見計つて猪突猛進すると否とにある。猪突猛進して敗れて死んだものもあるが、猪突猛進するの資質を備へずして名將となつたものは一人もない。(三)上杉謙信は軍人として天才であつた。一旦機會がくれば、單騎突進するを辭しなかつた。しかも彼は大軍を統率する伎倆がなかつたのではない。織田信長を攻めようとした時などは、軍容實に堂々たるものであつた。惜しいかな不意に死んで事は半途に畢つたが、若し

旗を京師に樹

握る。政權を

肯んぜず

承認しない。

Alexander the Great.

マケドニヤ王。

ギリシヤ、シ

リヤ、エブル

シヤ、イン

ド等(西曆

前三五六年

一三三三年)

(二)Caesar, Julius

Cesar. ローマ

の軍將、

政治家、文

武の勢力隆

たつた。後

堂で反對

の黨を刺

された。西

曆前四〇

年(西曆前

三三八年)

(三)Philip, 六

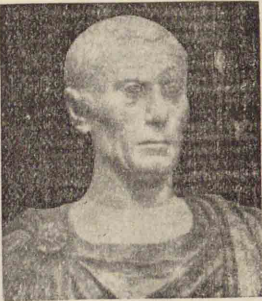
年(西曆前

三三八年)

(四)Rubicon, 話

柄の種。

今少しく生きながらへてゐたなら、旗を京師に樹てたに相違ないのである。織田信長はなるたけ危きより遠ざからうとしたやうであるが、今川義元が大軍を以て攻來り、左右皆暫くその銳を避けんことを勧めた時、一人肯んぜず、逆に間道から敵陣に突進し、大捷を



シザ

得て勢を一變した。(一)アレキサンドル大王やシザは、世界の英雄として聞えてゐる。アレキサンドルは幼い頃父王フィリップが他國を征服したり、強敵に勝つたりした報知がくる毎に、父王にまづ世界を征服されてしまつては、自分の大功名を建てる餘地がないと悲しんだといふが、彼は戰に臨んで常に劍を抜いて先登第一に突進した。シザが意を決してルビコン河を渡つたことは、有名な話柄となつてゐる。赫々たる偉業これに匹敵し、或はそれ以上と見做されてゐるナポレオンは、時として軍旗を手にし、衆の前に

名將と凡將〔自修文〕

天佑
天のたすけ。

(1) Count Helmuth
von Moltke.
ドイツの武將
軍略家、築城
家として有名
である。(西曆
一八〇〇年—
一八九一年)



モルトケ

驅出して行つた。後皇帝の位に陞り、稍自ら重んずるところがあつたが、それにしても平然として危きを犯したのであつた。彼は自ら天佑を有する英傑として、決して彈丸が中らぬと信じてゐるのだといはれた。彼はこれを聞いて、我はさる迷信をもたない。彈丸は固よりいつ中るかも知れない。しかし、前に居つても後に居つても、中るものならば中る。どこに居つても同じことだと思つてゐるだけのことである。といつた。

(1) モルトケの如きも、思慮周密、到らざるところなかつたが、一たび意を決すれば、いかなる困難が横たはつて居ても、これを貫徹しなければ止まなかつた。ネルソンも強固な決断力によつてその功を顯した。事は深く考へるよりも、断乎として行ふにある。考へるのは固よりよい、できるだけ考ふべきである。しかし、たゞ考へるのみでは際限がない。或邊に思ひきりをつけなければならぬ。

(1) Petrograd.
今のレニング
ラードのこと。
(2) Moskva.
ロシヤの皇帝
ニコラス一世
(西曆一八七
五年—一八九
五年)

狂氣のさた
氣違ひのしぐ
さ。

介在
挟まつてゐる。

暴虎馮河
虎を手打ちに
し河をかちわ
たる。無謀な
冒險をする。



ニコラス一世

ばならぬ。

ロシヤのペトログラードからモスクワまでの鐵道敷設についで、紛々たる議論があつた時、時の皇帝ニコラス一世は、定規を取つて二都の間に一直線を引き、この通りにせよと命じた。そしてその通りに行はれた。固より妄りに一直線を引くのは賞むべきことではない。山嶽、谿谷、いかなる所でも一直線にとはいふのは、狂氣のさたである。必ず沿道を踏査した上でなければならぬ。しかし、かの二都は一直線が最も適して居た。その紛々たる議論の間には、種々な私利私慾が介在してゐた。そこで皇帝は快刀亂麻を断たれたのである。

いかなる事にもせよ、得あるところには幾分の失が伴ふことを免れない。猪突猛進には損失が伴ふ。世人は猪突猛進の人を目して、暴虎馮河死して悔いざるものといひ、進むことを知つて退く

周匝
よく行届く。

逡巡

あとずさりす
る。

(一)三宅雪嶺の著
大正三年實業
之世界社發行

(二)源顯基。後一
條天皇に仕へ
た。永承二年
(一七〇七年)
歿。

配所

玲瓏

俯仰天地に

愧ぢず

肝膽相照ら

す

眞澄の鏡

ことを知らない猪武者といふ。しかし、猪の勇と力とあつて、なほ周匝しゅうさつな思慮分別しんりふんべつがあり、平素容易に決断せず、断ずれば勇往邁進ゆうわうまいしんして、決して躊躇逡巡ちゅうじゆすんじゆんしないやうにしなければならぬ。——世の中——

四 月光と古人

一 菅 公

むかし顯基(一)中納言といふ人は、罪なくて配所の月を見れば、(二)「といつた。月夜の玲瓏隈なき光は、俯仰天地に愧ぢることのない心を以て眺めてこそ、肝膽相照らす友である。眺められる月に一點の曇もなく、眺める我が心に一塵の汚もない麗しさ。良心の眞澄の鏡は、即ち皎々たる月の光に外ならぬ。心靜かに月を見て、靜かに月を楽しむ人は、世に一人の友

一介

(一)延喜三年
五十六年
年五十九。歿

もなく、一介の同情者なくとも、誠に天地の廣い人である。天地に愧ぢない人である。

罪なくて配所の月を見た人は、菅原道真(一)であつたらう。

海ならずたゝへる

みづの底までも

きよき心は

月ぞ照らさん

の一吟を味はつて見れば、公の心は清朗明徹である。



(筆風雅原吉) 遷左公菅

老境

清朗明徹

何の犯した罪もないのに、右大臣の高官から落されて、大勢の子供も散り散りばらばら、稍老境に入つた身を以て、筑紫

皎潔

左遷

(一)延喜元年。

の果に棄てられた當時の公の境遇には、何人も深く同情しななければならぬ。公の行は餘りに月のやうに明白であつた。公の心は餘りに月のやうに皎潔であつた。公が秋月に問ふといふ詩には、「爲問未會告終始被掩浮雲向西流」とある。公の左遷は公の光明を嫉んだ浮雲の所爲であることは、昔も今も知らぬ人はない。公が月に代つて答へる詩に、「天迴玄鑿雲將霽。唯是西行不左遷」と自ら慰めてゐるのや、秋夜の詩に「月光似鏡無明罪」とあるのを見ては、公の心は光風霽月、何等一點のやましいところのないのがわかる。九月十日の夜、月影清く、蟲の音涼しい配所の秋には、前年の御遊を想ひ出して、去年、今夜侍清凉。秋思、詩篇獨斷腸。

口吟す

心づくしの月影

(一)本居宣長の子。文政十一年(二四八八年)歿、年六十六。
(二)元正天皇の時、遣唐使となつて、我が國に赴き、(一四三〇年)かたの地を七十年たつた。

恩賜御衣今在此。

捧持毎日拜餘香。

と口吟された。嘗ては九重の雲居の上に見た月を、今は配所の月と詠められた公の心事は察するに餘りあるが、公のやうな偽のない心を以てこそ、月に對しての問答もできるのである。公が配所の慰藉は、梅よりも、菊よりも、家郷の書信よりも、恐らくは心づくしの月影であつたらうと思ふ。

なかなかに心づくしの浮雲も

ひかりを添ふる有明の月

(一)本居春庭

二 安倍仲磨

都の月、筑紫の月、同じ人でも見る境遇によつてその感はさまざまである。菅公の胸中人を怨みる心なく、世を憤る心

天涯萬里
故山



時、

もなかつたが、おもひ一たび故郷の親しい人々の上に及んでは、堪難い悲哀の念も湧いたであらう。況んや天涯萬里、波の外なる外國にあつて故山を思ふほど、切實な感慨はない。月は同じ天邊の月である。我が思ふ人も、我を思ふ人も、ひとしく同一の月を眺めるのである。月の光は同じいけれど、月の照らす風物は同一ではない。むかし安倍仲磨が唐土にあつて歸國しようとした

あをうな原

(一)支那唐の詩人、字は摩詰、西曆六九九年、西曆五九九年、
(二)同じく唐の大詩人、字は太白、年一、西曆七六二年

萬死に一生

あをうな原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも



(筆齋容池菊)磨仲倍安

の詠歌には、王維、李白の徒までが泣いたといふ。當時の交通は今日のやうに容易ではない。遣唐使の乗る船は四船といつて、四つの船を出した。これは海上の危険が多いから、萬一を慮つたのである。難破して海底の藻屑となつた人も、澤山あつた。この危険を冒して海外に行つたのも、當時の支那の文明を日本に輸入しよう

(一)元正天皇即位
二年(一三七
六年)
(二)印度支那東部
の國

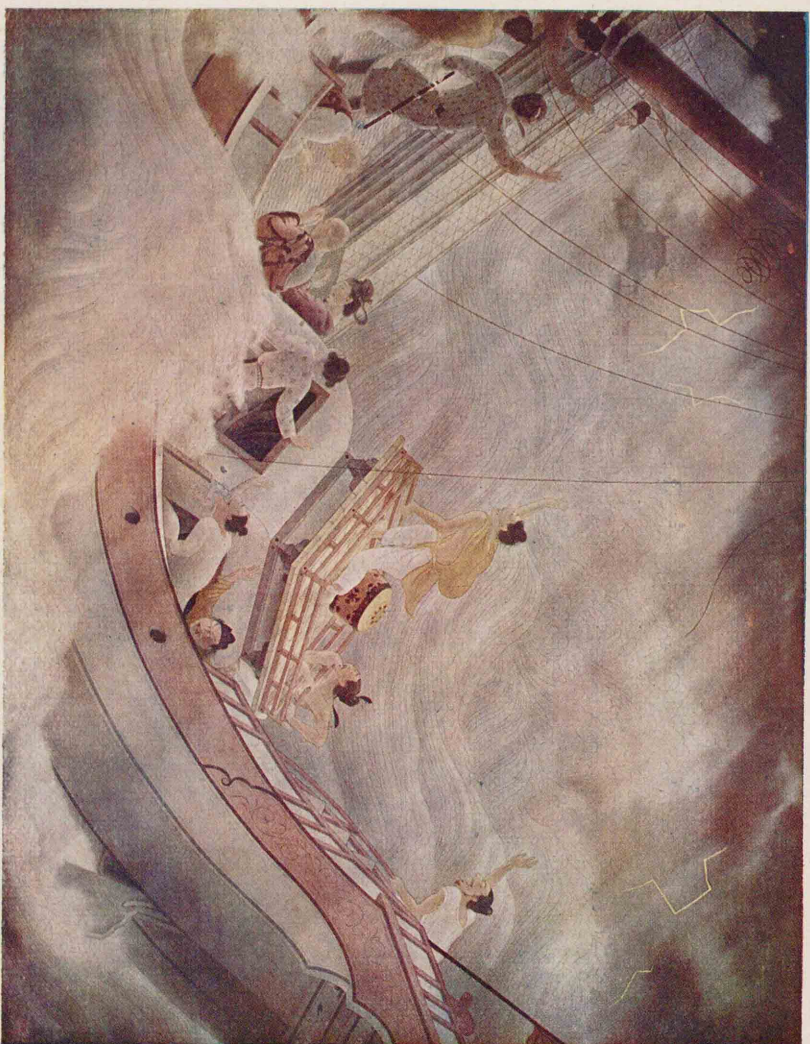
(三)李白の詩。

といふ熱心からであつた。

仲麿は靈龜二年船出して、暴風に逢つて安南近傍へ押流され、それから更に支那に入つたが、終に日本へ歸航する機會を失つて、かの地で死んでしまつた。かの三笠山の歌を思へば、どのくらゐ一度故山の景色が見たかつたであらう。(三)長安一片、月萬戸擣衣聲。この夜景を見る毎に、想は常に繪のやうな青によし奈良の都に飛んで居つたのであらう。李白が仲麿を哭する詩、

日本、晁卿辭、帝都、
明月不歸、沈碧海。

征帆一片繞蓬壺、
白雲秋色滿蒼梧。



陸 延 中 村 野 陵 筆

五 健康な秋の大地

川路柳虹

秋の自然の特徴ともいふべきは、空氣の澄んで、冷徹な底に一切の色彩が鮮かに映ることである。所謂天高く馬肥ゆといふ言葉の通り、空は遙かな彼方の上にその碧をたゞへてゐる。

しかし、この澄んだ天空、冷徹な空氣、晴れやかな色彩も、秋の季節と共に生まれるものではない。夏から秋への移り變りに起る颱風の一過し、燃えた焔をうち消すやうにして、夏の姿をかき亂す嵐が、いつか冷やかな空氣をもたらずと共に、濁つた水蒸氣の多い温かい空氣が一掃されて、冷たく晴れやかになつてくる。それからその嵐と共に起る雨——時

秋霖

要素

Sports



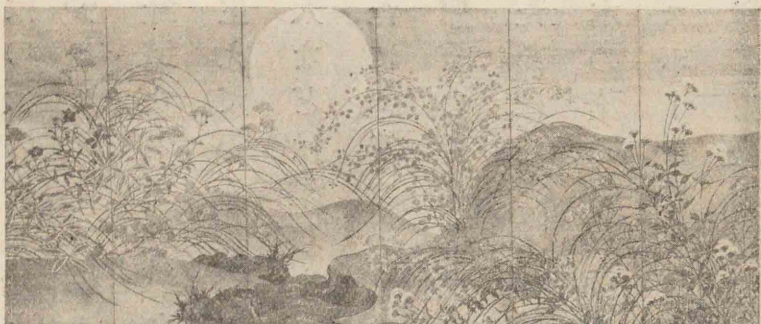
武蔵野 (筆彦道端津) の一

にはすでに秋霖とも思はれるくらゐな長雨が、十月頃まで續くこともあるが、その雨によつて濁つた空氣は一層清められ、冷たい氣温と共に、自然の姿を更に澄んだ清いものにするやうである。

秋の詩趣には、要するに二つの要素があらう。即ちこの澄んだ聖者の瞳のやうな清高な秋、そして収穫の秋、果實の實のり稲の穂のたわな秋、スポーツの秋、散策の秋——それ等は快活で

凋落

(一)新古今集にある西行法師の歌



武蔵野 (筆彦道端津) の二

光明的な秋の側面である。しかし、この反面は凋落の秋、すべてがやがては滅亡へと急ぐことを思はせる秋、たとひ木の葉の色づき果實の熟する輝かしさ、樂しさはあつても、それは一瞬の光耀に過ぎないことをも感じさせる無情の秋、悲愁の秋である。古來我が國の文學に表れた秋の情趣は、どちらかといへば、皆この凋落死滅の悲哀をのみ悲しむ秋ばかりである。こゝろなき身にもあはれは知られけり、しぎたつさ

(芭蕉の句。
蕭々

はの秋の夕ぐれ。とか、^(一)枯枝に鳥のとまりけり秋の暮。とか、さういふ寂しい蕭々とした情趣のみである。實際遠い田舎の野道などで行暮れて、身の丈よりも伸びた野の草の蕭々と生えてゐる彼方に、薄れ行く落日の影などを眺めて、昔の旅人などは誰しも、あはれ」といふ感情をこの自然から直観したに違ひない。しかし、それは今日鐵路の縦横に走り、村落や都市の所在に點在する現代の野からは、それほど思ひつめた「あはれ」ともいふべき情趣は見出せまい。我々は寧ろ輝く木の葉の美を愛し、散策に渴いた喉を冷たい溪流で潤ほし、スポーツに疲れた體を野の草の上に横たへて、高い天空を仰ぐ愉快を感じずる方がよほど自然である。悲しむだけが「詩

(Sportsman.
寛濶
眞個

を知ることでではない。秋の色の美しさを畫家のやうに賞し、秋の野の快さをスポーツマンの心のやうな寛濶さで味はふことが、現代の青年として眞個な秋の詩趣を知ることではあるまいか。私の「郊外秋景」といふ小詩を引いて、秋の野の姿をしのぶとしよう。殊に武藏野は、秋によつて始めてその尊さが知れる。我等の郊外の秋は、決して寂しく悲しいものではない。

電車から見る廣い地と蒼空。

都會がその折りかさなる屋根を

次第次第に低めて行き、

翼をやすめる小鳥のやうに、

まばらに地の上にうづくまる

小さい町はづれのあばら家。
 それに連なつて展開する
 碧の菜畑と低い木立と、
 そして食鹽のやうに白い小徑が、
 小高い丘のあたりに消えると、
 そこには草葺の屋根にまじつて、
 赤い屋根の可憐な洋館が、ここにも、かしこにも、
 童話のなかの家のやうに見え隠れる。
 秋は高く澄んで空につぐみを鳴かしめ、
 都會へ通ふ荷車の響もさわやかに、
 ゆき交ふ電車のなかで子供は
 小旗を振つて「萬歳」を叫ぶ。
 新しい木の香の匂ふ貸家が、

かはいい停車場の側にふえ、
 不斷にとんかんと鑿の音が、
 あたりの静かな空氣を動かす。
 健康な大地は一齊に黄金に輝き、
 熟した木の果は樹蔭に充ちて、
 採る人の手を待つてゐる。
 「野に出だよ」といふ聲が、
 自然のどこからか聞えてくる。
 この恵まれた秋の郊外に、
 友よ、すこやかな日光と空氣とを
 思ふさま吸はうではないか。

景觀

六 植物と氣象との關係

植物の景觀と自然の氣象との間には、自らなる關係ありて、互に相依り相扶けて、以てこの宇宙の美を現出するなり。故に晴、雨、雷、風、雲、霧、露、月等の、さまざまの氣象に對する植物の景觀に注意すれば、誠におもしろき趣あるものなり。

春の日の霞たなびきたる中に、山櫻の咲亂れたるは、誠に趣深きものにして、その調和の美いふべからず。今假にこの櫻花をして澄みわたれる秋の空に開かしめば、いかなるべきか、恐らくはその優美艷麗なる特性は、十が一をも現ずること能はざるべし。また春の野の霞にこめられて、をち方の

をち方

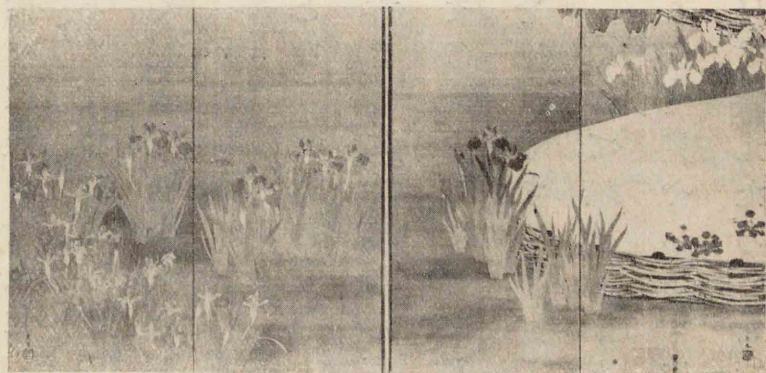
山々は淡き紫色に匂ひ、蓮華、蒲公英などの一面に咲亂れたる中に、蝶、蜂などの訪れ来て、心地よげに飛狂へる光景は、よく花曇の日和と和して、誠に長閑なる心地せらる。

新緑の候となれば、快晴の日にも空氣は水分を含みて、何となう夕立の雲起りくべきかと思はるゝものなるが、その青き空に、綠滴らんばかりなる竹樹の枝さし交はしたるは、その配合殊に妙にして、人をしてそゞろに夏のおもしろきを感じしむ。

やがて晩秋の節となれば、空氣清らかになりて、遠きあたりまで見やらるゝに、楓、公孫樹などの霜に色づきたるが夕日に映えたるさまなど、またいひ難き趣あり。冬の末より春

清曉
雪に傲る

幽情



燕子花 (都築眞琴筆)

の初にかけては、寒さ厳しき清曉に、梅、臘梅などの雪に傲りて、いち早く咲出でたるは、氣高く心地よきものなり。

雨のおもしろきは、燕子花、花菖蒲などの咲出づる梅雨の頃なるべし。降るかと思へば、また降出でて、そのたび毎に花の艶麗を増すなど、人をして限りなき一種の幽情を催さしむ。殊にこれ等の植物の花弁と葉とは、自ら雨を

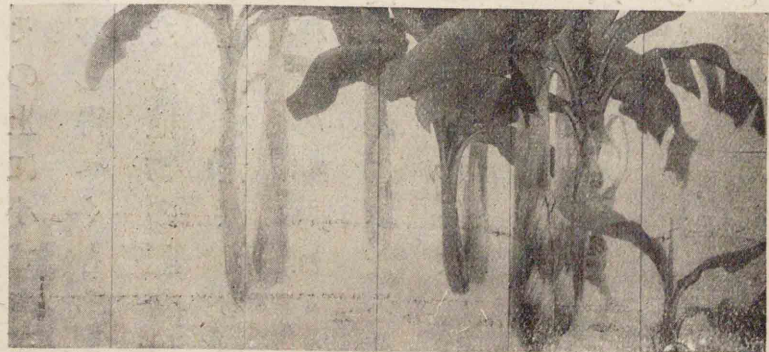
餘滴

防ぐやうに作られたるを以て、雨滴はその上に小さき玉水となりて留れるが、その美しさ誠に形容し得べくもあらず。驟雨などの烈しき雨にも、また自らなる植物の配合はあるなり。それは多く雨滋き地に生育せる植物、またはさる地より移し植ゑられたる植物にして、かの梧桐の如きはその一例なり。その直立して膚青き幹、その浅く切れこみたる廣き葉の、一は新たに洗はれて、一入鮮緑の色を増し、一はばらばらと音を立てて、その葉末より餘滴を滴らする光景は、よくこの植物のかゝる急雨に適せるを示すべし。

蓮の葉もまた雨を受くるに適せるものなり。それは葉の表に一面にピロイドのやうなる細かき突起ありて、その間に

空気を含むを以て、雨に遭ふとも少しも濡るゝことなければなり。かくてまたその空気はよく光線を反射するを以て、葉の上に留れる玉水をして、一種銀色の光を放たしむ。芋の葉も殆どこれに等しき構造をなせり。

秋雨につきて聯想せらるゝ植物は少からざれど、まづ人の心を引くは芭蕉なるべきか。秋も末になりて、その葉の破れ、筋の現れて、見るから



(筆華秋橋高) 蕉 芭

はかなげなるに、寂しき雨のうちそゝぎたる、人をして殆ど蕭條の氣に堪へざらしめんとす。



(筆舉春元山) 雪の杉

松は特に雨に適せる植物にはあらねど、その雨に潤ほひて、細き葉の束ねたるやうになりて、少し俯きつゝ、雨滴

しめやか

を滴らするさまは、またしめやかなる趣なきにあらず。雪は寒國のものなれば、これに適するは寒地の植物なれど、暖地の植物にもまたこれに遭ひておもしろき景色を見

魁偉

するものあり。かの常磐木の類例へば、樅、杉、松などの類の濃
緑なる葉の、純白なる積雪の下より露れたる、また南天の赤
き實のその間にほの見えたる、共に色彩の配合上見棄て難
き美觀なり。また松のその魁偉なる枝もて、竹のそのしなや
かなる枝もて、積雪の重みに堪へたるさまは、一は豪壯、一は
清楚なる趣ありて、共に賞すべし。

なからすや
は

風の趣もまた棄難し。そよ吹く風の草木をわたりて優し
き樂を奏する、木枯の落葉を吹捲きて、凄じき音をたつる、共
に興なからずや。殊に野邊の薄水邊の蘆の秋風に戦げる
趣は、秋の風物の最もあはれ深きものなるべし。また秋の夕
澄みわたれる空に、一點の雲もなく、さしたる風のわたると

松濤
松籟

も見えぬに、樹々の梢のそよそよとうち戦ぐは、いひ知らぬ
あはれの籠るものなり。

松濤、松籟、また一入の趣あるものなり。平地は風吹くとも
覚えぬに、松の梢のひとり美妙なる樂を奏し出づるは、誠に
何の音ぞと怪しまる。古來幾たびか詩人の吟詠に上りつら
ん。

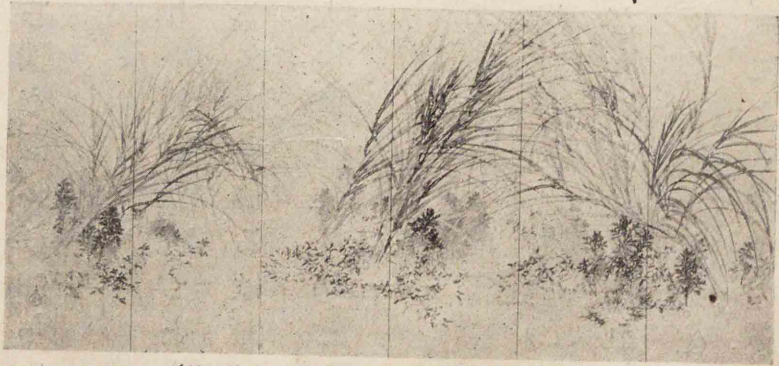
凍雲

雲は四時をわかずをかしきものなり。春の山にたなびき
て花かと思紛ふ白雲、夏の空に奇しく崩れかゝれる雲の峰、
秋の野に飛迷ふ薄雲、いづれも皆とりどりのあはれ籠れり。
また冬の日、かの木曾、日光あたりの樅、梅、落葉松などの生茂
れる高山を深く立ちこめたる凍雲は、誠によく幽邃の趣を

現すものなり。

霧は高原に多きものなれど、平地、平原にもまた全くなきにあらず。夏の頃、朝霧の立ちたる時、杉、樅などの常磐木の見え隠れするさま、田、沼湖水などの一面にこめられたるさま、また一種の風趣あり。

露は夏、秋に下るものにて、朝夙く起出でて叢の間を行かば、その葉毎に美しくして、恰も白玉の如くなるを見ん。殊に稻、蘆などのやうなる禾本科の植



(筆穂百福平) 露 朝



(筆邦春橋佐)

梧
美なり。

物、また露などの葉の縁なる露は、規則正しく置けるを以て、その観頗る美なり。
月は季節によりてその観一ならず。春の夜は曇がちにて朧月多し。世にはこの朧月に夜櫻を配して、得難き美景なりといふものもあれど、かの朝日に匂ふ山櫻の、優美にして壯快なるには比すべくもあらず。夏の月はこれに反して、頗る快活なるものなり。殊に雨過ぎし木の葉、草の葉に映じたる月光は、いひ

中秋

(一)林逋、山園小
梅の詩から出
た句

適くとして
佳からざる
なし

景致

難き涼味を生ぜしむ。中秋の満月は空に冴えて、その光まこ
とに常と異なるは、人のよく知るところなり。
月夜に適せる植物は餘り多からず。かの暗香の浮動を賞
すべしといひならはせる梅なども、その花の美観は、なほ晝
間を以て勝れりとす。されど一面よりいへば、取出でてこれ
といふべき好配合のなきは、たまたま以て、適くとして佳か
らざるなき月の美質を示せるものにして、松の月、柳の月、梧
桐の月、皆とりどりのあはれを具へざるはなく、さては秋野
の満月、夏山の曉月など、いづれも他に求め難き景致を具ふ
るにあらずや。

—三好學「植物生態美観による」—

七 「鷹が渡る」

野村傳四

「鷹が渡る」といふ鋭い聲が、秋の空氣を突抜けて、村の一隅
から起る。同じ聲が他の一隅にも起る。稻の穂波の黄ばみわ
たつた田の中からも起る。椿や竹の林に隠れた家からも起
る。時は愁人の膚そゞろに寒い頃、渡鷹の一群が南を指して、
秋の空を渡り行く偉觀は、余が故郷なる大隅の南端を除い
ては、日本國中いづれの地にも見ることはできない。

嘗て余は黒潮の流を下つたことがある。流の早い海峽を
通過したこともある。深碧の潮の流は直径十數町にわたる
一大圈を劃して、盛に渦を巻き、眞白な泡を表面に漲らして、
汽船をも巻きこみ、岩をも押流すやうな勢で流れて行く。雪

朔北

寒き朔北の天地から、椰子の葉青く風薫しい南洋の冬に渡つて行く一種の鷹は、正にこの潮流と同じく、大空を廻轉しつゝ、進んで行く。そしてまた同じく偉觀である。

音を發すると間もなく空に吸ひこまれる花火の烟ほどの雲もない秋の空は、日本晴に晴れて、天上には秘密な隱家もない時、南を指して雙翼を伸したこの避寒客の數は、十萬か、五十萬か、はた百萬か知らぬ。初め鶉くらゐに見えた一群の鳥は、高く舞上る爲に、障害物もない大空に、直徑數町もある一大圈を劃し始める。一隊が一廻轉したかせぬかといふ頃になると、鶉くらゐに見えた形が、雀くらゐに小さくなる。すると、一隊は一まづ南方へ流れ出す。夢のやうにすうと飛

墨痕



雄姿 (廣瀬東畝筆)

んでは翼をせはしく使ふさまは、隼に似てゐる。暫くするとまた廻轉し始める。雀ほどの影は更に遠ざかつて、糠蟲ほどになる。更にまた流れ出す。かくして廻轉を繰返し行く間に、一個一個の影は、青絹の上に落した墨痕のやうに見える。そして一隊が南へ去れば、後の一隊がその後を襲ふ。後の一隊が遠ざかれば、またその後の一隊がこれに續く。しかもこの大集團に一羽の外れるものもなく、聲を立てるものもない。恰も南より北に奔る天

隊伍肅々
神韻縹渺

の川が、あらゆる星の影を掠めて、晝の間を逆に流れるが如くに見える。百萬の師が隊伍肅々として、萬里遠征の途に上るさまをも想像させる。神韻縹渺たる詩集の一卷を繙くやうな心持にもなる。

首途

「鷹が渡る」といふ聲が、この時村のどこかに響きわたると、直ちに全村の注意を引く。小學校の兒童は一同廣い校庭に飛出して、空を仰ぎ、手を拍ち、ちだんだ踏んで、「鷹よ、鷹よ」と、小さい喉も張裂けるばかりに叫びつゝ、一行の首途を祝してやる。老人は靱を一杯に干した庭に滑り下りて、見えぬ眼を擦りつゝ、青空を見上げて、過去幾十年の秋の記憶を繰返す。黄ばみわたつた畑に立つ夫婦は、しばし鋏の手を休め、頭の

げげんな

蠢々

手拭を取つて顔の汗を拭きつゝ、一度空を仰ぎ、互に相顧て、更に笑顔に一行を見送る。鷹は旅を急いで、どンドン南へ去る。見送る人の心はさまざまであらう。
裏の畑に穂を摘む鶏は、げげんな顔を上げ、長く伸した頸を傾けて、空中の壯觀を見る。今まで竹藪に火の附いたやうに騒いでゐた群雀は、ちゆちゆといふ一羽の合圖にびたりと鳴りを静め、ひれ伏して、笹蔭から天上の行列を送る。茅葺の屋根に秋の日を浴びて、睦ましく遊んでゐた家鳩の夫婦は、遽しく我が巢に引籠つて、空を仰ぎ見ることすら敢へてしない。渡鷹の大奇隊は蠢々たる地上の影を顧もせず、悠々として南へ去る。かくて前後一二里にわたる大軍は、僅少な

殿軍

蜿蜒

(一) 鹿兒島縣(大隅國)肝屬郡九州の南端

(二) Philippine (比律賓)臺灣の南方に在る群島

弱冠

山村水郭

(三) Panorama

殿軍を除けば、時餘にして全く通過し、それより二三里を距てた地に蜿蜒として南方の空を壓する。五千尺以上の山脈を眼下に見、進んでは佐多岬の燈臺を兒戯と觀て、洋々たる大洋を、きのふもけふもと南へ越えて行くのであらう。目的とする所は臺灣か、(二)フィリピンか、但しは南洋の島々か。

「鷹が渡る。余は弱冠にして家を出で、故郷の秋に背くことここに十幾年である。しかし、身は何處の境に在つても、この一語を想ひ起せば、直ちに故郷の遠山、近嶽、山村、水郭を背景として、渡鷹の大軍が一大パノラマ(三)の如く眼前に浮かぶ。眼を閉ぢても去らぬ。それと共に、幼時の秋の記憶は、余の腦裏に黒潮の如く渦巻き、渡鷹の如く廻轉する。

八 晩秋の草と蟲

秋も末、冬の初の日向などに、落葉に莖を埋められて咲いてゐる龍膽らんたうは、實に清々しい。濃紫にいくらか藍の混じたやうな深い色で、それはどうしても、落葉の早い山國でなくてはよく見られない。

つゝらをり

つゝらをりはるけき山路のぼるとて路に見

てゆく龍膽の花

同じく秋の終の花に刈萱があり、吾木香わねもかぢがある。寂びたやうで、想の外に艶麗なのは吾木香であらう。刈萱もまた見るにつれて、暖かみの感じられる花である。すがれ始めた野邊

すがる

の日向の花としてふさはしい。秋の初から終まで、その時その時に見て見飽かぬのは薄である。

わが越ゆる岡の路へのすゝきの穂まだわか
ければ紅ふゝみたり

の頃もよく、十五夜、十三夜の月見には、何はなくともこの花ばかりは供へたく、また秋もいつしか更けて、八千草の枯伏した中に、この花だけがほの白い日影を宿して戦いでゐるのも、わびしいながらに、なくてはならぬ風情である。

野菊、姫紫苑も見落してはならぬものである。

庭園の花には、ダリアあり、コスモスあり、黄菊、白菊あり、鶏

(Dahlia)
(Cosmos)

小春日和
塵寰

頭がある。ダリアは夜深く机の上に見るがよく、コスモスは小春日和の窓に恰好である。鶏頭は素朴な花で、塵寰を避けて栖む庭の隅などに咲くべきであらう。

うごかじな動けば心散るものを椅子よダリア
アよ動かずもあれ

うなら寒く
なり来て心
てぞを庭見
にくまなる
秋の月夜を
牧水

うらなむ心ふり来て見えてみよ
庭にまふさ秋の月夜をね水

蹟筆水牧山若

くれなるの色ふかみつゝ、鶏頭の花はかすかに實をもちにけり。薄の花を蟲に譬へるなら、まづこほろぎではあるまいか。

さほど際立つたものでなく、さていつ聞いてもしみじみさせられるのは、こほろぎの音である。

わがねむる家のそちこち音に澄みてこほろぎの鳴く夜となりけり

月並
松蟲や、鈴蟲や、轡蟲は、餘りに月並化されて居る。では、どの蟲が最も好きだらうと考へて見るに、私にはまづ馬追蟲である。常に田舎住ひをして居る有難さに、この蟲がをりふし蚊帳に飛んで来て、澄みきつた音で鳴くのを聞く。

やすらかに足うちのばしわが聞くや蚊帳に
来て鳴く馬追蟲を

いへ人のねむりは深し蚊帳にゐて鳴く馬追

よ聲かぎり鳴け

—若山牧水の文による—

九 妙義山

河東碧梧桐

(一)長野縣北佐久郡東長倉村。
(二)もと信濃高原と坂東平野とを通ずる要路であつた。

(三)長野縣北佐久郡と群馬縣吾妻郡とに跨がる火山

汽車を輕井澤に捨てて、その高原に立つ一孤峰兜山を左にしながら、碓氷の舊道をたどる。足柄箱根と並び稱せられたこの要害の地も、今は寂れに寂れて、二三の民家が遺るばかり、枯残つた菊もものあはれな風情である。峠に上る前から降つてゐた淺間の灰は、茶店の床几を薄鼠色に染めてゐた。畑の冬菜も、活々した緑がどこか底濁りがして見える。すでに葉の落ちた樹々の梢は、どんよりした夕空に溶けこんでゐると思ふと、目に見える限りのものが、たゞ一様に鼠色

量す
残滓

に量されて居る種々な色彩が一つの沈澱池に打ちこまれて、たゞその残滓が乾いてゐるやうだ。さうして遠くで巨砲を放つやうな淺間の鳴動は、どろどろと複雑な反響を伴なつて、その残滓を更に搖り固めるやうだ。立つて動いてゐないと、我等もまた目に見えない凹みへ搖りこまれるかとも疑はれる。

ここに舊碓氷街道と別に、右方に新たな徑が開かれて、熊(一)平驛に出ることが出来るやうになつた。土地のものはこれを紅葉見の道だといふ。碓氷の舊道は汽車に不便であり、その新道即ち軌道に沿ふ街道は、深く溪間に入るのので、紅葉の眺望に適しない。その全勝景を瞰下するには、この峠よりす

(一) 信越線碓氷山中の驛。横川と輕井澤との間。

崎嶇羊腸

る峰傳ひに限るといふので、一昨年始めて開鑿したのであつた。

僅かに一里許の短距離に過ぎないはずの道が、もと前後左右の眺望をむねとし、凹凸の數限りない峰頭をのみ行くので、所謂崎嶇羊腸中には攀難い峻しい坂があり、なほ斧痕の生々しい木の根を中にする馬の背越のやうな所もある。汽車の笛や音も聞えるべき山でありながら、人跡の稀な深い山に迷ひ入つたかとも怪しまれるほどであつた。紅葉の時機は過ぎ、眺望を専らにする時間でもなかつた。淺間の鳴動は次第に耳近く響いてくる。夕暮の暗さは益、迫つて來た。一步を誤れば懸崖に落ちるやうな危険な木立を過ぎて、熊、

平に下りたのは、すでに停車場の燈火を懐かしむ頃であつた。

紅葉見の客を誘ふ道としては、餘りに心を引かれぬものであつたが、上州と信州とを界する山岳帯、雪線以上に達する秀峰には缺けてゐるとはいへ、凡そ四五千尺の兄たり難く弟たり難き峰々の鎬を削る雄偉なさまは、恐らくこの道をおいて他に求むべからざる眺望であつたらう。さうしてまた妙義の山中に入つて、親しくその巖石に接するよりも、この道よりする妙義觀の方が、却つて幾多の神秘を語るものであつた。

上信國境の山岳が重疊として居るとはいへ、單に幾多の

峰巒

畸形

大田潭。號は南畝。狂文の士。狂文の名を以て有名なり。年四十八。年七十三。五年歿。

峰巒が波濤の如く相起伏して居るといふのではない。悉くが犬牙の峰なのだ。龍爪を欺く奇峰なのだ。鋭く尖つたのも



妙義山

あれば、畸形に伸びたのもあり、一つ一つを見て、蜀山人の壬戌紀行に、「これまで巖山を見しかど、かゝる嶮しき巖の色黒きが、雲を凌ぎ立てる

を見ず。唐畫に描ける山のごとし」といつて居るやうな奇怪嶮峻なものが、見る限り、横にも擴り、縦にも立並んで居るのだ。

(一) 信越線磯部驛、
群馬縣碓氷郡磯部村。
(二) 信越線安中驛、
群馬縣碓氷郡安中村。

端倪すべからず
(一) 長野縣上水内郡に在る。最高峰海拔二四〇九米。
剝落

上州の平地から碓氷川に沿うて溯り、磯部^(一)、安中^(二)と過ぎて、妙義の連峰をうち仰いだ時には、その崔嵬^(三)の奇峰は、獨り白雲、金洞、金鶏の諸峰に限られて居つたやうに思つて居たのが、この碓氷よりする裏面觀中の山々は、悉くが白雲となり、金洞となり、また金鶏ともなるのだ。どれが妙義山であるかも判別し難い巨齒の露出したものになるのだ。殊に雲間を漏れる夕日が、その一牙一爪に屈折する光を投げかけて、散残つた爪牙の間の紅葉を染返す瞬間の變化は、やがて全幅の波動となつて、一牙の魔消えて一爪の魔現れ、眞に變幻躍動、端倪すべからざるものになるのだ。

信州の八岳^(四)、戸隠山の如く、舊火山が雨雪の爲に外皮を剝

奇峭
支離滅裂

(一) 徳川時代の俳人。谷口氏、後與謝氏。天明三年(一八二二)歿。年四十八。
(二) 群馬縣碓氷郡松井田村。碓氷川に沿つてゐる。
(三) 徳川時代の畫人。谷氏。天保十二年(一八四一)歿。年七十八。

落したものが、その骨髄をのみ留めて、奇峭の趣をなしてゐるとしても、かゝる支離滅裂とも思はれるほど大規模の鬼鑿を現出するものは、他に多く類を見ないのである。たゞその洞門石橋の奇、即ちその表面觀をのみ見て、碓氷よりするその裏面觀の存するに心づかぬのを遺憾とする。俳人蕪村^(一)が松井田附近よりこの山を仰いで、

立去ること一里眉毛に秋の峰寒し

と吟じたのは、所謂裏面觀ではないけれども、文晁^(二)の名山圖譜と對比して、他の凡眼者流と選を殊にするものあるを思ふのである。

—日本の山水—

一〇 夕もやの野

中西 悟堂

野にはもう夕靄が流れ始めた。
 あちこちの枯木立の梢は夕日の殘光に深められ、
 静けさと平和とに領せられた麥畑には、
 黙つて農夫が働いてゐる。
 その敬虔な労働の姿よ。
 とときどき鍬が白く光るが、
 靄はもう彼等を包みながら、
 青麥の上を生きもののやうにはひまはる。
 畑の路を
 ざるをかゝへた娘が家路の方へ歸つて行く。

悉ない

ざるに盛られた野菜の新鮮な緑、
 そして頬被の下に見える娘の顔の單純な健康な笑よ。
 娘は畑をぬけて、
 木立の道を夕餉の煙吐く垣根の方へ
 はだしのまゝ急いで行く。
 神の言葉に充ちた平和な野よ。
 ここには愛とゆるしの外の何物もない。
 地平線には墨繪のやうな富士が風に吹かれてゐて、
 その上にゆふべの星が出現した。
 農夫たちがそれにむかつて一日の悉ない労働を感
 謝し、
 あすの幸福を祈るところの慈悲ある星が出現した。

一一 冬枯の大井川

千葉 龜雄

東海道(一)島田の驛はここに盡きた。この川一つを向ふへ渡れば、そこがすぐ金谷の町だといふ。今、大井川(二)の冬枯の堤に立つ。

飽くまではしやぎきつた初冬の空は、底も知れぬほどに凝つて蒼く、見るも寒げに、高く高く澄んでゐる。白い雲が、時ほつちり浮かんで、また一たまりもなく吹流される。風の風いだ大海に、白い帆影が現れては、また滑つて行くとも思はれる。日影は小春日のやうに暖かいが、風は飽くまで冷たく、骨を刺す。岸の川柳の葉が半ば枯れて、ほろほろと水に

(一) 静岡縣(駿河國志太郡、大井川の東岸。)
(二) 同(遠江國)榛原郡、大井川の西岸。
(三) 甲斐の白根山に發し、駿河、遠江の國境をなして海に入る。長さ四十六里。
はしやぎ

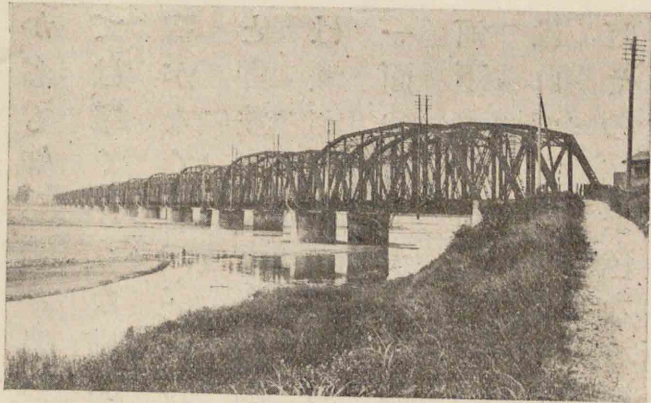
名にし負ふ

(一) 長野縣諏訪湖に發し、遠江に入つて海に注ぐ。長さ五十六里。
隨一

〔Sepia〕

こぼれる。肩をすぼめて、俯いて泣いてゐるのではあるまいか。名も知らぬ小鳥が、矢のやうにひよいひよいと飛んで出ては、擘くやうな細い聲で、ひいひいと啼いて行く。冬が来た。宿がなくなつた。と泣くのかも知れぬ。名にし負ふ(一)天龍、富士と押並んで、東海道隨一(二)の大河と呼ばれたこの大井川も、今は瀬が涸れ、水が落ちて、廣さ何町といふ石ばかりの河原が、一面のセピヤ色(三)に眼前に展開されてゐる。見わたす河上も河下も皆川原である。石といつても、幾百年となく激流に洗はれて、握飯のやうに圓くなつて、灰色に晒されたごろた石だ。その灰茶色な石原の中を、いくつにも割つてちろちろと白く動くのは、大井川の流であらう。白い流水は、日光を浴び

瀬枕立つ



今の大井川

て青く緑に閃き、小石を噛み、大石を噛んで、瀬枕立てて、滔々と流れて行く。小鳥の時たまに啼く聲が、他界からでもくるやうに響く外には、河の兩岸のこの眞晝を、寂として鍛冶屋の鈍音一つ響かない。若し夢に容かたがあらば、この静寂が即ち夢の容であらう。若し夢に聲があらば、この流の聲が即ち夢の聲であらう。水は滔々として、百年二百年の夢を見て、夢のやうに流れてゐる。岸に立つ人また恍として、いつしか二百年三百年の昔の夢を繰

返さざるを得ない。



昔の大井川 (筆重廣)

「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。」
 どことなく長閑な馬の鈴が、ちやらん、ちやらんと鳴つて、空にも入れよ、地にも徹れよと、清きよしい馬子唄の聲が夢に入る。あゝ、富士といはず、天龍といはず、一葉の船、一本の棹で越されぬ河流がどこにあらうか。獨り大井川だけが、船で越すことを許されなかつた。徳川幕府が江戸に移つて、始めて關東を經營す

ると共に、大井川を東海一の要害と見た。若し船で上流に溯り、下つてこの河の形勢を見極めるものがあれば、天下の守は悉くこれから破れる。乃ち令して川越を行はせたと、土地の歴史に精しい人は説く。

かくて裸一貫の荒くれものは、川越人足の名をもつて、東海道唯一の名物となつた。さしも鬼を取挫ぐ剛情武士も、その背に負はれては、ぐうの音も出ず、島田、金谷の全盛目を驚かしたのも、今は昔だ。汽車で通つてしまふ今日では、寢てこそ渡れ大井川、その大井川の冬枯の岸に、今初冬の日光を満身に浴びて立てば、盡きせぬ流の聲も、無意味に聞くことはできぬ。石に碎けて咽せぶのは、昔の全盛を聞け」と語るので

衰頹

はないか。今の寂しさに泣いてゐるのではないか。自分はゆふべ日が暮れて島田の驛に降りた。降りる人は僅かに一人二人。狭いプラットホームを潜つて驛を出ても、人力車一つあるではない。風が海のやうに吼えてゐた。寂然として眠つた山々の影が、くつきりとくぎつた空線の上に、満天の星の光が冴えて、ぶるぶると震へてゐた。舊式な懸行燈の火影をたよりに、鞆を抱へて、舊驛の一夜の宿を探した自分は、今更に島田の宿の衰頹を泣かざるを得なかつた。

一二 本居翁の遺蹟

薄寒い朝風に面を吹かせて、野山の景色を眺め行く樂し

喬松

(一)三重縣(伊勢國)飯南郡花岡村にある山。

爪先上り

さ。早稲田はすでに刈りつくしたが、晩稲田は金色に波立つて、豊年の喜を見せてゐる。一里以上の路を往復するらしい一年生くらゐな小兒の連立つて行くのも、勇ましく心地よげに見える。尾花や野菊の交つてゐる疎な小松原の道を通つて、やがて喬松の亭々と聳えた山の麓を過ぎる。あの山は何、この山は何、御墓はあそこ、この山の茂みの所です。」と車夫の語るのを聞きながら、いつしか山室(一)に着いた。
車を捨てて、爪先上りの坂道を上つて行く。繁つた木の間を流れる溪流の音、都に馴れた目や耳には清らかに珍しい。杉、松、椎などで小暗い路を稍四五町も上つた所に、浄土宗の寺がある。妙樂寺といつて、翁には深い關係のある寺である。

(一)秋田の人。長保十三年(一〇三四年)五月六日(十八)歿。宣天。

それから右へ左へと九十九折を喘ぎ喘ぎ六七町も上ると、古い木の鳥居があつて、十數段の石磴の上、二三十坪くらゐ



本居宣長の肖像とその筆蹟

「本居宣長之奥墓」と題した墓石がある。山室山神社といふが、社殿も何もない。翁の墓の左手に圓い石があつて、平田篤胤大人の

が平地になつてゐる。その中央の小高い盛土が即ち翁の墓である。上に櫻の木が一本。

なきからはいづくの土になりぬとも

魂はおきなのもとに行かなん

と刻んだのが立つてゐる。

篤胤大人は翁の歿後の門人で、生前に教を受けられたこととはない。しかも數多の門弟子の中で、ひとり翁の傍にはべつて居られるのは、さぞかし満足なことであらうと思ふ。この墓所はかの妙樂寺の持地面であつたのを、翁が懇請して、生前に占定して置かれたのである。その承諾を喜んで、住僧に宛てられた手紙は、今なほ同寺で珍藏してゐる。

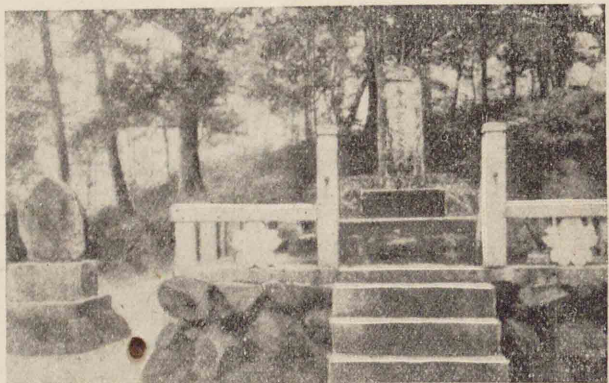
占定す

やま室の山に千年のやどしめて

風に知られぬ花をこそ見ぬ

かすまふ

卓絶



本居宣長の墓

と詠まれたのはこの時である。二十年來、一日として翁の書物を読まぬことのない後進の一書生が、今始めて翁の墓前に額づいて、感慨は眞に無量であつた。百歳の世は隔つれど教へ子にかずまへませと拜み額づく翁が歿後の門人は幾百萬の多きに上つてゐるであらう。その著書の卓絶な學術上の價值と、偉大な感化力とは、未來永劫に歿後の門人を作りつゝあるのである。世に學者の事業ほど偉大なものはない。

見はるかす

(一)飯南郡

この墓所は山の頂にあるので、眺望の美しさは比類がない。青々とした伊勢の海を見はるかして、志摩、三河、尾張などの崎々、山々、近くは松坂町を眼下に見る。富士の山もいつもはちやうどあのあたりに見える。と、ホテルの主人は指さした。千古に卓越した偉大な學者の奥城としては、誠にふさはしい場所である。

妙樂寺に入つて一憩し、翁の書幅を拜し、參拜名簿に記入などする。ここの眺望も誠に美しい。元來、翁の祖先の檀那寺で、翁はをりをりここに遊ばれたのである。

松坂へ歸つて城址の公園に行く。ここに鈴屋遺蹟保存會があつて、翁の舊宅がそのまま、で保存されてゐる。また新し

(二)鈴屋は翁の號

遺愛のもの

稿本

舊態

(一)今の戸主、翁五世の孫

い倉庫には、翁の自筆の草稿、遺愛のもの、醫業用の藥箱なども陳列されてゐる。どの稿本も丁寧に綺麗に認めてあつて、翁が四十餘年の勤勉篤學、人をして襟を正さしめるに足る。舊宅はもと魚町にあつたのを、市中で火災の虞もあるから、保存會でこの舊城址の一角に移したのである。しかし、庭の樹木置石まで、一切舊態を存するやう苦心したといふことで、本居清造といふ表札まで、そのままになつてゐる。臺所のかまども、井も、便所も、舊のままの形が遺されてゐる。下が抽斗になつてゐる小さい階子段を上ると、二階が四疊半の書齋、その床の柱に三十六の鈴が六つつつ六段に繋がれて懸つてゐる。(これは模造品で、本品は陳列庫に在る。)これが即ち

〔Weimar.〕
ドイツの都
會。
〔Johann〕
Wolfgang
von Goethe.
ドイツの詩人。
〔西曆一七四
九年—一八三
二年〕
〔Johann〕
Christoph
Friedrich
von Schiller.
ゲテと並び
稱せられるド
イツの詩人。
〔西曆一七五
九年—一八〇
五年〕

翁が一切の著書の述作された場所で、この四疊半から日本
 全國を吹靡かす風が舞起つたのである。西向の窓から差し
 こむ夕日は、さぞ堪難かつたらうと思はれて、この質素な家
 居のさまが、愈、翁の人格を大ならしめる。ドイツのワイマー
 ルで、ゲ^(一)テヤシル^(二)レルの舊宅を見た時にも、その偉大な事
 業と、その質朴な家居の状態との對比をおもしろく感じた
 が、この鈴屋の遺蹟には、一層その感を深うした。ゲ^(一)テ、シル
 レルの舊宅を見た時は、日本にもかういふやうに、偉人の遺
 蹟を保存したいものだと思つたが、今やそれが實行されて、
 まづこれを翁の舊宅に見ることを得たのは、誠に悦ばしい
 ことである。

豁然

返咲

ゑる

この公園は四望豁然、パノラマを見るやうで絶景である
 が、翁の遺蹟を移して、更に崇高な威嚴を加へた。我が國に翁
 あるは我が國の誇。松坂町民の誇は、翁の遺蹟に越したもの
 はない。城の大手門を出でて數十歩、縣社山室山神社がある。
 社殿、瑞籬が神宮風の様式であるのは、一入嬉しく感じた。小
 春日和の麗かさに、このあたりの櫻の木が幾本となく返咲
 をしてゐる。宿の主人の話に、先年東郷大將の來られた時も、
 返咲を見られて、さすがに本居翁の郷土故、櫻は一年中咲く
 のだらう。といはれたといふことである。

さくら木にゑりし百千の卷々ぞ
 風に知られぬ花にはありける

心の洗濯〔自修文〕

柴田鳩翁

日ざし 日のさしぐあひ
八つさがり 午後二時過ひどく腹のへつたのをいふ
釜の中の蜘蛛の巣がはるなく

知行 生活のもとて

月代 もと男が髪を半月形にそつたこと。さかいたこと。いふ

江戸神田邊に、至つて貧乏な大根賣がありました。或日例の通り一荷の大根を擔ひ、朝早うから賣歩いたが、どうしたことやら、その日は一把の大根も賣れぬ。日ざしを見れば、はや晝すぎ、腹の時計は八つさがり、財布の中にはまだ一文の錢もたまらぬ。これはつまりぬ。この大根が暮方までに七百文の錢に化けぬと、忽ちあすは釜の中に蜘蛛の巣がはる。どうしたらよからうと工夫しながら、いつのまにやら兩國橋を渡り、本所の屋敷町を、大根、大根と賣歩いた。或御屋敷の表長屋の窓の内から、これ大根屋とつぶやれ嬉しや、まづ知行にありついたらと、つぶよを見れば、表御門から右へ三つ目の窓の内から呼んだのぢや。そこで大根屋が、表御門から荷を擔ひこんで、御長屋へ廻つて見ると、門から三軒目の高塀の内、門口には何某と標札が打つてある。荷を持ちこんで見れば、縁先の障子をあげ、旦那殿が今月代を剃

百に三把 一把三十三文。

懸直 懸直より高くいふ直かぶり頭

しやうもやうもなく とうともしかたなく

られたと見えて、鏡立に向かつて自分の髪を結ひながら、その大根はいくらぢや」といふ、百に三把でございます」といへば、それは高い。二十四文づつにして置け」といはれる。賣りたいには賣りたけれど、も、現在損のたつことなれば、どうぞ三把にお買ひなされて下されい。けさから江戸中を泣歩いて、まだ一把も賣れませんか。どうでも賣つて歸らねばならぬ大根、懸直は一切申しません」といふ。かの御侍かぶりふり、それでも高い。まからずば、まづよしにせう」と言捨てて、縁先の障子をはたと締められた。大根屋もいろいろというて見ても、かの御侍が相手にならぬ。そこでしやうもやうもなく、はてつまらぬ。もう日の入には間もなし。何でも四百の錢を持つて歸らぬと、親子五人があすの命が繋かれぬ。何としたものであらう」と、手を組んで思案をしながら、縁先の金だらひにふつと目がついた。障子は締めてある。あたりに見る人はなし。かの金だらひを水の入つたまゝで、大根二三把の下へそつと

ぬからぬ顔
油断のない顔

絶體絶命
何ともしやう
がない。逃げ
られぬ。

われは
汝は
きつう
ひどく

隠す。怖いものぢや、今まで廣かつた世界が、立ちどころに狭うなつて、五尺の身體を暫くも置くべき所がない。
そこで荷を擔いで、門口を出ようとする、障子の内から「これ大根屋」と呼びかけられる。ぬからぬ顔で、まかりません。「といふと、いや、直はねざるまい。その大根買はう。」といひさま、障子をさらりとあけられた。

大根屋もびつくりしたが、どうぞして逃げて去なうと思ひ、何把ほどいります。はした賣はできません。「いふ、いや、はしたでは買はぬ。その大根皆買はう。この縁先へ並べてくれい。」といはれる。さあ大根屋も絶體絶命、障子の締つてあるうちなら、金だらひの出しやうもあらうに、今更金だらひが出されもせず。というて、賣るまいともいはれず、逃げて行かうにも、荷を捨てて歸つてはならず。千百萬の後悔も、今になつては間に合はず、うろろうろとしてゐると、かの御侍が、大根屋の顔をきつと見て、われはきつううろたへてゐる

根性
こゝろね。

氣立
きまへ。性質。
氣色
やうす。

ぞよ。まづ金だらひから出して、大根の敷を敷へて見よ。」といはれる。大根屋は總身に冷汗を流して、もう斬られるか、ぶたれるかと、わなわな震へながら、かの金だらひを耻づかしさうにそつと出して、土に手をつき、「旦那様眞平御免なされて下されませ。何を隠しませう。先刻も申します通り、けさからまだ一文の商もいたしません。このまゝ、歸りますと、あす親子五人が食べますことがありません。悲しい貧のぬすみ根性、面目次第もござりません。七つを頭に子供が三人、どうぞ親子五人が命をお助けなされて下さりませ。」と、色青ざめて、土にあたまをすりつけて、わび言をする。

かの御侍、思の外氣立のよい人で、更に立腹の氣色も見えず、「いや、そのわび言には及ばぬ。まづ大根の敷を讀んで見よ。」といはれる。こはごはながら、大根を縁へ積上げたところが二十三把。かの御侍大根賣を呼んで、「さあ、その方がいふ通り、二十三把七百六十四文、序に金だらひを添へて遣す。貧のぬすみとはいひながら、われが根

(一)鳩翁の講話を
あつめた書。

性はよほど汚れてあると見える。この金だらひは、顔や手足を洗ふ
道具なれども、心の洗ひやうもあるものぢや。持つて歸つて、とつく
りと思案をし、心の垢を洗ひ落せ。と言捨てて、障子を締めて内へは
いる。かの大根屋もこれから本心になつて、夜晝働き、三年目には遂
に相應な八百屋になつたといふことでもあります。——鳩翁道話——

一三 鐘 聲

落合直文

西の都の或寺に詣でしに、小法師のころもの袖を後のか
たに結び掛けて、鐘撞きゐたるを見たり。それよりはいづこ
の鐘聞きてもそのさまの思ひいだされて、一入あはれを覺
ゆることとなりぬ。その後、東の都の或寺にて、印半纏とかい
ふもの着けたる下衆男の脛もあらはなるが撞きゐたるを

失意 順境 逆境 庇護

見たり。それよりはまたいづこの鐘聞きても、そのさまの思
ひいだされて、更にあはれも覺えずなりぬ。ひとしく無常を
告ぐる鐘の聲なり。されど西の都の鐘の響ならでは、我が涙
は出づべくもあらずかし。

——萩の家遺稿——

一四 讀 書

坪内逍遙

常に良き著書に親しむものは、たゞ獨り居れども寂しき
ことを覺えず。師を求めざれども日に月に學ぶところあり。
失意にも慰み、不平憂悶もこれを忘る。書は少年の滋味にし
て、老年の娛樂なり。順境には心の飾ともなり、逆境には庇護
と慰安とを與ふ。外に出でたる時も邪魔とはならず。家に在

①Rome.
(羅馬)
②Marcus
Tullius
Cicero.
ローマの雄辯
家、哲學者、政
治家、(西曆紀
元前一〇六年
—四三年)

れば心を樂しましむ。夜の伴、旅の伴、僻地の伴。とローマの名士(二)キケロのいひしも同じ心なり。されど、此の如きは吾人が讀書より受くる最大なる利益にはあらず。

諺に「百聞、一見に如かず」といへるは、何事もその身親しく經驗するに如かずといふ意味なれど、人の壽命限りあれば、七十、八十まで生きたりとも、目に視、耳に聽くことは、幾何もあるべからず。我が日本國內の山水、風俗だけにても、一生には觀察しつくさるまじきを思ひ、天地の大いなるを思ひ、時の窮りなきを思へば、人間一身の經驗の狭く、淺く、小さく、且つ少かるべきは、いふにも及ばぬことなり。さればこそ、今も昔も、苟も事物の眞の理を知らんと欲し、事物の眞の相を觀

碩學

梅うゝと春
師の長日か
のらとゆき
きかくゆき
立ちくらし
つもせうえう

んと欲する人々は、一方には見聞を勵み、經驗に努むると共に、他方には廣く内外古今の名著を得て、これに親しまんことを願ふなれ。所謂名著は、人間世界開けてこの方、凡そ三千年間に出でたる大賢、高德、碩學、大才の經驗、觀察、思索、想像を



蹟筆遙道内坪

そのまゝに、またはランビキに掛けて備へたるものなり。或は顯微鏡、望遠鏡に譬ふるも可なり。素より人工に成りたるものなれども、人をして肉眼に看難き微かなる物をも、遠く且つ大いなる物をも看取するを得しむ。後れて生まれたる

一斑を窺ふ

ものにして良書の助を借ることなく、たゞその貧弱なる腦力のみを恃まば、自然界の事も、人間界の事も、僅かに一斑を窺ふに過ぎざるべく、それすらも、正しく明らかに看得ざるべきが常なり。要するに、書は知識の寶庫にして、かねて智を研く砥石なり。しかしながら、讀書の要はなほこれに盡きたるにはあらず。

Francesco Petrarca (西暦一三三〇—一三七四年)
William Ellery Channing (西暦一七八〇—一八四二年)
啓發す

イタリーの詩人ペトラルカはいはく、余に良友あり。彼等は皆名士大家にして、いづれも偉業をなしたるものなり。余若しその助を藉らんとせば、彼等は喜んで我が請を容る。と、これ良書が常にその讀者を啓發し、指導し、鼓舞し、獎勵する力あるをいへるなり。北米の名士チャンニングもいはく、吾

俊傑

吐露す
John Milton (西暦一六〇七—一六七四年)

私淑す

人が傑出せる心と相語ることを得るは、主として書籍の媒介に因る。而してかゝる價知らぬ交際的手段は、衆人の自在に用ひ得るところなり。最良の書に在りては、俊傑吾人に向かひて語り、その最も貴き思想を吾人に與へ、且つその心靈を吾人の爲に吐露す。と、英國の詩人ミルトンもまたいはく、「良書は保存して後世に備へられたる俊傑が貴重なる生血なり。」と、人は良書に親しみて、まづ我が卑小なるを知るなり。次には或は他の識見の大いなるに驚き、或は品性の高きに感じ、嗚呼、同じく人といふ、高く、清く、美しく、偉なること此の如きものあるか。と歎ずるなり。若しかりそめにも、その偉なるもの、美しきもの、清きもの、高きものに私淑し、これに倣は

んとする志を生じ、日に、月に力め行ふに至りなば、書の用極れるにちかしと謂ふべし。
— 中學修身訓 —

一五 樂地

幸田露伴

いかなる所にも、樂しき地はあるべし。またいかなる所にも、樂しからぬ地あるべし。花笑ひ、鳥歌ひ、天長閑に霞み、水緩やかに流るゝ春の日に當りても、快きことのみ懷に滿つべくはあらず。且の曇には雨を疑ひ、夕べの風には寒さに怯ゆることもある例なり。雪雲の日を障へて暗く、大地凍りて土に生色なく、人畜共に萎えかゝむ冬の時に當りても、うら悲しきことのみ胸を塞ぐといふにもあらず。或は水仙の一

興を涌かす

金殿玉樓

茅居草屋

二輪に清き優しさを感じ、或は暮鴉の三四聲に寂びたる趣を覺え、木の根焚く山家の爐の邊に罪なき話の興を涌かし、ぬく灰はたく焼芋の暖かきに笑むをかしさもあるべし。金殿玉樓にも、樂しからぬをりはあるべく、茅居草屋にも、樂しき所はあるべし。事物は大凡たゞ一向ならぬものなれば、いと、樂しからぬが中にも、樂しき所、樂しむべき所もあるべきなり。

樂しき所、樂しむべき所を見出し得れば、いかほど窮苦不快の中に在りても、人は自らに勇氣を得て、苦中の苦に耐忍び、やがて人上の上となり得ることもあるべし。さなきまでも、樂しからぬが中に、樂しき地を見出さんことを常に心が

身に賦す

けて、その習慣を我が身につくる時は、朝夕に心も潤く、氣もゆたかになりて、自ら人品も宜しくなり、分別も正しくなり、世をば楽しく過すやうにもなるべし。
樂地を見出すべし。努めて樂地を見出す習慣を身に賦せんと心がくべし。

行商

昔或江州の行商人と他の國の行商人と、共に碓氷の坂路を登り行きけるをり、夏の日の烘るが如く熱きに、商ふ品の嵩高く重かりければ、二人とも憊れ苦しみて懃ひけるが、苦しみの餘りに、江州のならぬ商人、碓氷の山の今少し低くもあれかし。身すぎの道に苦しからぬはなけれど、かばかり高く峻しくは、行商を廢めて、歸り去らんとしも思ふなり。」と

身撓んで心
撓まず

一路兩人
一境兩狀

溜息つきて歎じけるに、江州の商人うち笑ひて、坂も同じ坂なり、荷も同じほどなれば、御身の苦しむほどは我もまた苦しみて、かく息も喘ぎ、汗も流るゝなり。されども我はしか思はず。この碓氷の山を十ほども重ねたる高き山もあれかし。さらば數多き行商人は、皆半途より身も憊れ、心も弱りて歸り去るべし。その時、我一人いかにもして山の彼方に到り、思ふがまゝに商賣して見んとは思ふなり。碓氷の山の高からぬこそ口惜しけれ。」といひけりとぞ。

同じ苦難の中に在りてもよく樂地を觀るものは、身撓んで心撓まず、力衰へて勇衰へず。一路兩人、一境兩狀。よくよく思ひ味はふべきなり。

— 洗心錄 —

たのしみは〔自修文〕

橘曙覽

たのしみは珍しきふみ人に借り
 はじめ一ひらひろげたる時
 たのしみは紙をひろげてとる筆の
 おもひの外によくかけし時
 たのしみは妻子睦ましくうち集ひ
 かしらならべて物を食ふ時
 たのしみは朝起出でてきのふまで
 なかりし花の咲ける見る時
 たのしみは心になふやま水の
 あたり静かに見てあるく時
 たのしみは常に見馴れぬ鳥の來て
 軒とほからぬ樹に鳴きし時
 たのしみは物識人に稀にあひて

いにしへ今を語り合ふ時
 たのしみはそゞろ讀行く書の中に
 われとひとしき人を見し時
 たのしみは三人の子供すくすくと
 おほきくなれる姿見る時
 たのしみは稀に魚煮て子らみなが
 うましうましといひてくふ時
 たのしみは家内ぢやう五たり五たりが
 風だにひかでありあへる時
 たのしみは數あるふみをからくして
 うつしをへつゝとちて見る時
 たのしみは神の御國の民として
 神のをしへを深くおもふ時

橘曙覽全集

(一)山城國(京都府)葛野郡

一六 蛙物語

山岡 元 隣

昔、太秦(一)のほとりの池の蛙ども多く集れる中に、大きな蛙の跳とび出いでていへるやう、我々歌といひ軍といひ、文武二道を汚し仙術にも通ぜる身の泥龜づれと同じやうに、四足を以てはひまはれることこそ安からね。されど天性四足と生まれつきぬる身の、自身の力としてはかなひ難かるべし。いかにもして、ここの薬師如來に大願を懸けまゐらせ、二足を以て歩き、二つの手を以て用事をかなへ、萬蟲の至尊となりて、たとひ蛇などが追ひ來とも、一足も退かず、手を以て防ぎはべるべし。』といへば、皆々、然るべし。』と同じけるに、その中に

同す

布施

參籠す

(一)「これやこの行くもかへるもわかれつゝ、知るも知らぬも逢坂の關し、後撰集、蟬丸」

一つの蛙進み出でて申しけるは、佛陀その報恩の禮儀を待つとしもなければ、若しその願かなひはべらば、何をか布施にいたすべき。作善なくては如何。』とあれば、これこそ誠にいはれたれ。』とて、或は「水草の花を奉らん。』といひ、或は「沙を塔と組みて佛に供養せん。』といへるも口々なりけり。皆々この議に傾きて、一心稱名の大願を起し、一七日參籠しければ、七日滿ずる明方に、多くの蛙二足を以て立ちにけり。いかばかりか自由なるべきと悦びしに、想の外に引きかへて、兩眼後のかたへなりしかば、行くべき方には眼なく、眼ある方へは足進まず。これやこの行くもかへるの進退ここに谷りければ、またいろいろ祈願しなほし、からがら昔の身になりけり

とかや。

一七 我が家の富

徳富健次郎

永遠を思ふ

宇宙

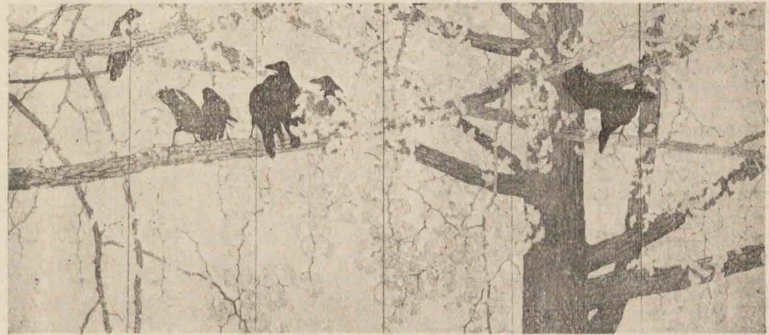
家は十坪に過ぎず。庭はたゞ三坪。誰か「ふ、狭くして且つ
 陋なり。」と。家陋なりと雖も膝を容るべく、庭狭しと雖も仰い
 で碧空を望むべく、歩して永遠を思ふに足る。
 神の月日はここにも照れば、四季も來り、風、雨、雪、霰かはる
 がはる至りて興淺からず。蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥
 來りて遊び、秋蛩また吟ず。靜かに觀ずれば、宇宙の富は殆ど
 三坪の庭に溢るゝを覺ゆるなり。
 庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開

須臾

いて樹に滿つ。風ある日には、薄青く霞める空より、白き花ち
 らちらと舞ひて、一庭須臾に雪を散らす。
 隣家に花樹多し。風に隨ひて飛花我が庭に落つ。紅雨霏々、
 白雪紛々、見るがうちに滿庭花の衣を着く。仔細に見れば桃
 の花あり、櫻の花あり、椿の花あり、山吹の花あり、李の花あり。
 庭隅に一株のくちなしあり。五月闇鬱陶しき頃、香しき白
 花を開く。主も妻も無口なれば、この花の我が家に開くは宜
 なりけり。
 老李の背後に一株の梧あり。碧幹亭々として少しのゆが
 みなく、我が如く直かれと教ふるに似たり。梧葉と手水鉢の
 側なる入手とは葉潤うして、我が家の雨聲を多からしむ。李

滾々

(一)梁田蛻巖。明石藩の儒者。寶曆七年(一七八一年)八月十六日(二)蛻巖の九月九日の詩。



(筆雲耕田山) 杏 銀

熟して白粉ふきたる琥珀玉の滾々と地に落つる頃は、與へて喜ばせん男子一人欲しと思ふ心も起りぬ。つくつくぼふしの聲に世はいつしか秋に入りて、山茶花咲き、三尺許の楓も紅に燃えいで、たゞ一株前の家主の植ゑのこしたる黄菊も咲出づ。名苑の花美しといふとも、秋のあはれ閑寂の趣は、却つて我が庭の一枝にあるべし。蛻巖の翁ならば、獨^(一)憐^(二)細菊近^キ荆扉^ニとや吟ぜん。耻づらくは、海内文章落布衣^トと

翻々

唱すべき身にあらざることを。

屋後に一株の銀杏あり。秋深くして満樹金よりも黄なり。木枯の風起れば、その葉翻々として飜り落つ。半夜夢覺めて雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に金色となりぬ。屋根も、庇も、手水鉢も、所として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落添ひて、寸金と人はいふなる錦を我は庭に敷きつめぬ。

木の葉落ちつくしてはさすがに寂しげなれど、日影、月影愈多くなりて、空を見、星を見るに障少きは嬉し。

—自然と人生—

葉守の神

一八 枯 林

吉 江 喬 松

寂しいものの極みのやうにいはれてゐる冬枯の林の中、
或夕方自分はその中へさまよひ入つた。一度は葉守の神の
宮居とも思はれ、百鳥の啼交はす紅葉の樂園とも榮えてゐ
た林の、今はもう葉といふ葉が悉く落ちつくして、いかなる
小枝の端の端までも、その跡をとめて見ることができ、樺の
樹、榛の樹、榎栗などの幹もあらはに骨のやうになつて、いか
にも寒げに立つてゐる。

林の中は寂然として、落葉を踏んで行く自分の足音の、次
第にこめてくる四邊の夕靄の中に消えて行くばかり、外に

横雲

は何の響もない。自分とはある榛の樹の幹によつて、凝然と
枝の端から上の方を見上げた。空にはまだほんのりと明る
く雲の浮いてゐるのも見える。よく春の夕方などに輪をな
して樹間に飛んでゐる小さい羽蟲の群も見えず、秋の暮方
晩く啼きながらねぐらに歸つて行く山鳴の聲も聞えない。
たゞ樹間を透して、日没後の餘光が微かに横雲の灰色した
のを下から照らして、低い山の頂と雲との間に細長い深紅
色を留めてゐるのが見えるばかり。その雲間を遠く眺めた
り、その紅の次第に黒くなつて行くのを見つめたりしてゐ
ると、我知らず涙が臉に溢れてくる。この時の寂しい懐かし
い思は、何に譬へようか。

この頃はもう嵐もたびたびは起らない。野を吹き、森を拂ひ、山を越えて、爲すべき任務をば爲しはてたのか、たゞ雪を含んだ雲をば、野末に遠く地平線の上を、彼方此方に追ひやつてゐるばかり、随つて夕嵐の林を襲つてくることもなく、闇の色の林の奥から次第に濃くなつてくるにつれ、寂莫が四邊を領してくる。

ふと氣がついて見ると、樺の樹の高い小枝に一片の葉がついてゐる。風のありとも思はれないのに、ひらひらと廻つてゐる。周圍が寂として音もなく動かないのに、この葉のみが微かに聲立てて躍つてゐるさまがいかにも不思議で、何か目に見えないものがその葉の蔭に来て、それをば吹鳴ら

五體の緊縮

してゐるのではあるまいかと思ふと、不意に怖いもの力が身に迫るやうな氣がして、五體の緊縮するのを感じるが、やがてその葉の搖ぎも靜まつて、枯林の中は眞暗になつてしまふ。自分はなほ動かうともせず、闇の中に立ちつくしてゐた。

或朝のこと、普通には霜をれがしたといはれるうら寒い曇つた日に、江戸川堤の上をさまよつた。霜が白く刈田の上に置き、堤の枯草の葉にも凍つて、掃集められるくらゐにも見えてゐるが、いつも霜の朝には見る華やかな麗しい日光の、けさは隠れて、灰色の雲が濃く、雀の啼聲も、をりをりどこからか、じいじいと寒げに聞えてくるばかり、寒さは肌に浸

霜をれ
(一)利根川の支流
 千葉縣下總
 國東葛飾郡
 を流れて武蔵
 國の境をな
 してゐる。一
 小利根川と
 もいふ。

傾聽す

みて、すべての景色が何となく頭の垂れるのを覚えしめる。ふとこの時頭上でからからと鳴る音を聞いた。見あげると堤の上に立並ぶさいかちの樹の梢に、莢と莢とが相觸れて音を立てるのであつた。またからからと鳴る。その寂しい響、思はず立止つて傾聽せずにはゐられない。下にはありとも思はれない風の梢高く來て觸れるのか、それとも莢の中なるさいかちの實のおのづと搖いで發するのであるか。自然の物音の中で、これほど寂しい思をさせるものはない。靜かな日に林の中でおのづと落ちる松毬の響や、夜更けて後庭つゞきの柴山に、ぼつぼつと落ちる栗の實の音、いづれも靜寂の感に堪へざらしめるが、霜枯のした川沿堤、さいかちの

實のからからと鳴るのを聞くほど、寂しいものはない。じつと眼を閉ぢて聞いてゐると、その響が胸に浸みこみ、身はさながら靜寂の中へ消えさつてしまふかのやうに思つてゐると、舊時のことや、故郷のことなどが胸に浮かんでくる。をりふし墓場などへ行つて見ると、四邊の靜寂な中で、墓標の榊の葉のみが、獨りさらさらと音を立ててゐることがある。周圍が寂しいだけ、それだけその物音は不思議な感を感じさせる。さいかちの實の鳴るのも同様で、寂しさの中心は、その物音に繋がれてゐるやう、聽くものの身も心もその物音に引きこまれ、われ孤獨といふやうな感が、ひしひしと胸に迫つてくる。

一九 清淨の國

大町 桂月

我が國の特質は少からざれども、特質中の特質ともいふべきは、清淨の國なることなり。日本國民は一般に清淨の美を愛す。その心清淨なり。その衣、その食、その家清淨なり。その國一體が清淨なり。清淨の美を解せざるものは、到底日本を解するを得ざるなり。

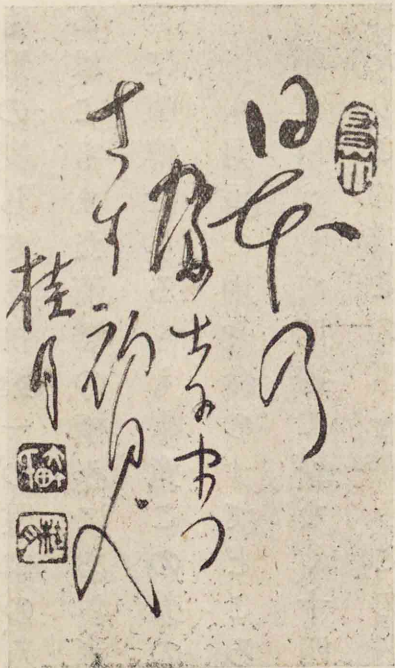
敷島の大和心を人間はば

あさ日々にほふ山櫻花

この歌が日本人一般に愛誦せらるゝは、國民精神の清美を歌ひ出でたればなり。一體朝は一日中にて最も清々しき

清暉

日本の富士
にまつさす
初日哉
桂月



大町 桂月 筆蹟
大ほ更に清々しきもの
なり。朝晴天、日の出、山
櫻、これだけの好き道
具がそろはば、何人か
爽快を覚えざるべき。

これ即ち大和魂の本體なり。大和魂は即ち清淨の粹なり。櫻花は散りぎはが潔し、日本男兒の死を惜しまざるに似たりなどといふは、枝葉のことのみ。

(一)山邊赤人の歌。

(一) 田子の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ

ふじのたかねに雪は降りける

扶桑

喧傳す

(二)榎本其角の句。

(二) 月雪の中や命のすどころ

積雪白うして四邊に聲なく、十四夜の寒月ひとり天に冴えたり。この夜、この雪を踏み、この月光を浴びつゝ、氷刃をきらめかして亡君の仇を報いんと討入るは、決死の四十七烈士。天も清し。地も清し。人も清し。當夜、吉良邸の隣屋敷にて催

(一)徳川時代の俳人。近江國滋賀縣。寶永四年(一七二七)歿。四十七

(二)大高源吾忠雄。元祿十六年二月四日切腹の時三十二歳。

されし俳會に列せし其角その人は、元來血性の快男子にして、清淨の美を身解せる人なり。而して義士の中に加れる大高子葉は、實にその俳友たり。月清きその雪の夜、無量の感慨は發してこの十七文字となる。實によく復讐の眞況と本體とを捉へ得て、清淨の美を極めたりと謂ふべし。

歌も、俳句も、名句と稱せらるゝものは、多くはこの清美を捉へたるものなるが、その他の美術、文藝、一つとしてこの心の結晶ならざるはなし。花に對する感じの如きもまた然り。近時、外國趣味の入來るにつれて、妖艷なる草花も輸入せられたれど、梅や、櫻や、蓮や、菊や、水仙や、昔も今も日本國民の一般に愛する花は、必ずや清淨なり。また建築に於ても然り。日

妖艷

光の東照宮、淺草の觀音堂を見る時、我々日本人はたゞ華麗

を感じるのみにして、尊さを感じる

こと薄し、然るに一たび去つて伊勢

日の大廟に詣でんか。千木高知れる建

光築、清淨の美を極めて、そゞろに西行

東の歌のしのばるゝを覺えずんばあ

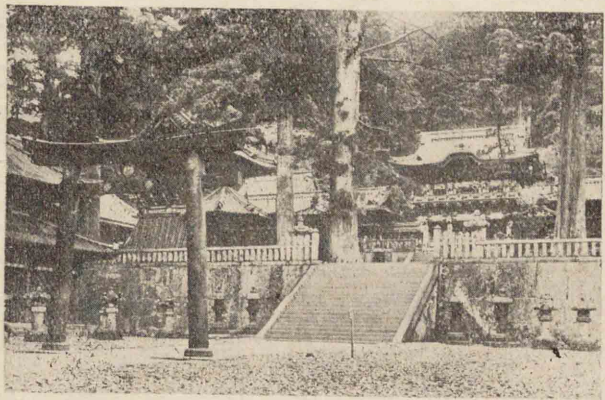
照らず。若し大廟に向かつて壯大を求

宮め、華麗を求むるものあらば、これ眞

の日本國民たる素質に缺けたる所

あるものといはざるべからず。

滄海の中にありて山青く、水清き我が日本は、土地そのも



のがすでに清淨なり。開闢以來未だ曾て外國に汚されざる
我が三千年の歴史がすでに清淨なり。他民族の血液を多く
混ぜざる我が民族の血統がすでに清淨なり。加之、我が國民
は善を好みて惡を憎み、正に就きて邪を排し、直を愛して曲
を嫌ひ、弱を扶けて強を挫き、よく忠に、よく孝に、よく義に、よ
く勇に、風流さへ解して、もののはれを知れる清淨なる人
間なり。我が日本が古來東海の君子國と呼はるゝも、宜なる
かな。

二〇 國歌の話

一國の音樂がどれほどその國の人情に左右されるかと

Ma
Marsellaise

國の子等光
榮の日ぞ來
血に染め野
主の旗は吾
に向かはぬ
げられぬ野
に暴兵の聲
聞かずや我
我が田を荒
武器をとれ
民等よ進め
進めりて鮮
我が畦を浸
んとす

いふことは、國歌などを見ると最もよくわかる。實に國歌の比較は、一面には國々の國體を比較することにもなり、またその國民の氣風性質などを知る便ともなる。今試に西洋の三大音樂國といはれてゐるイタリー、フランス、ドイツ三國について、その國歌を較べて見よう。

最初まづフランスの國歌「マルセーエイズ曲」について考へて見ると、これには貴族的傾向に對する反抗が表れてゐて、甚だしく平民的傾向を帯びてゐる。隨つて國歌の上に尊嚴といふものがない。そのかはり、感情は實に遺憾なく表れてゐる。一體感情を極端に表すといふことが、フランス音樂の一つの特徴となつてゐるのであるが、この國歌には、殊に

剽悍
理性

皇室中心主義

これが著しい。この意味でマルセーエイズ曲は、眞にフランス人民を代表する國歌として、ふさはしいものである。

次にドイツの國歌を見ると、これは全くフランスの反對である。ドイツ國民は頗る剽悍勇猛であると同時に、また理性が明らかで、徒に感情に走らない。隨つて感情中心のフランス音樂などとは大いに違つてゐる。この國には古來愛國的歌謠が頗る多いが、その愛國心といふのが、また我が國や、イギリス、ロシヤなどと甚だ違つてゐる。我が國は全然皇室中心主義であつて、愛國といふことは、即ち皇室を尊重することである。然るにドイツの愛國は、自國が他國に對して戦勝を得ることを喜ぶといふだけの思想から起つた愛國心

(一)「聲は雷の如く、響の響と交り、ての音とに交り、よ、ドイツの國、この河の防禦、者誰ぞ愛す、んぜよ、祖國の愛、る祖國の愛、て河國の愛、且つ忠實に立、

(二)「ドイツ人の祖國やいづこ、はたスロバキア、かの葡萄牙の國、のるか、葡の國、岸の泳ぐ、ツク、の泳ぐ、否、否、否、大なるべし。」

(三) Royal March of Italy.

である。随つて國歌は皇室尊崇などよりは、他國に對する威壓を以て第一の目的としてゐるのである。この點がドイツ國歌の特徴である。それは準國歌たる「ラインの守」及び同じく準國歌たる「ドイツ人の祖國は何處か」を見るとよくわかる。かやうにドイツの國歌とフランスの國歌とを比較すると、ドイツのが威壓的であるのに反して、フランスのは反抗的である。ドイツのが理性的であるのに反して、フランスのは感情的である。實にこの兩國の國歌を見ただけで、かの歐洲大戦争の光景が、目に見えるやうに感じられる。

翻つてイタリアはどうであるか。普通イタリアの國歌と云へば「ロイヤルマーチ・オブ・イタリア」と稱せられる軍歌風

(一)西曆一八六一

の進行曲であつて、歌ではない。これはなかなかおもしろく、愉快にできてはゐるが、尊嚴といふ感じは少い。餘り巧に作り過ぎてあつて、國民の眞情が流露してゐない。これは全くこの國の歴史によるのである。イタリアが現今のやうに統一されて帝國となつたのは、今から僅か六十年ほど前であつて、その時から始めて國家といふ觀念が急に勃興し、随つて愛國の歌謠も現れて來た。國歌のロイヤルマーチはこの時に生じたのである。けれども元來永い間の精神修養によつてできた愛國心ではなくて、歴史上の變動の爲に急に現れて來たものであるから、どうも國民の眞情が流露してゐない憾がある。且つまたイタリアでは從來音樂が頗る發達

(一)宮内省雅樂部
副長。明治二
十九年。歿。
六十六年。

意匠
旋律
表徴

して、作曲法の技も進んでゐたものだから、國歌が内容よりも寧ろ形式に流れてしまつて、國歌としては餘りに曲が上手過ぎ、飾り過ぎてゐる。さて日本の國歌はどうであらうか。



「君が代」は宮内省雅樂部の林廣守(一)の作曲で、割合に新しいものである。廣に係らず、イタリーのとは大いにその性質を異にしてゐて、非常に尊嚴なものである。今日我が國の國旗な

る旭日の意匠と、國歌なる「君が代」の旋律とは、確かに世界に對して、我が國の威嚴を示す表徴となつてゐるといつてよい。「君が代」の作曲は一度外國人が手を着けたけれども、不成

功に終つた。その後、林氏が全然古代の雅樂に則つて作られたのが現今の「君が代」である。我が國歌が、かゝる宮中の雅樂師、しかもその老輩の手に成つたといふのは、ちよつと異様であるが、實はそれが我が國の大幸福であつたのである。一體我が國上代の音樂は、眞に大和民族の眞情を流露した音樂である。かの神武天皇御作の久米舞などは、いかにも雄大且つ莊嚴なもので、これを宮中の饗宴に於て拜する外國の使臣は、皆その結構の偉いのに驚嘆するといふことである。かやうに大和民族本來の特性を失はずに、それに最もふさはしい形式の備つた音樂が、所謂雅樂である。さうしてこれを大體保留して傳へてゐた宮中の雅樂師が、「君が代」を

作曲したのであるから、それが大和民族本來の性情を具へてゐて、しかも形式に於て可なり立派なものであるといふのは、當然なことである。

— 田邊尚雄の文による —

元 日〔自修文〕

夏 目 漱 石

雑煮を食べて書齋に引取ると、暫くして三四人來た。いづれも若い男である。その中の一人がフロックを着てゐる。着なれないせいか、メルトンに對して妙に遠慮する傾がある。あとのものは皆和服で、且つ不斷着のまゝだから、とんと正月らしくない。この連中がフロックを眺めて、「やあ、やあ」と一つづついつた。みんな驚いた證據である。自分も一番あとで、「やあ」といつた。

フロックは白い手巾はんげを出して、用もない顔を拭いた。さうして頻りに屠蘇を飲んだ。ほかの連中も大いに膳のものを突つついてゐる。

〔Frockcoat〕
〔Melton〕
フロック
トの服地。

るところへ虚子が車で來た。これは黒い羽織に黒い紋附を着て、極めて舊式にきまつてゐる。あなたは黒紋附を持つてゐますか。やはり能をやるから、その必要があるんでせう。と聞いたら、虚子が、「え、

さうです。」と答へた。さうして、「一つ謠

ひませんか。」といひだした。自分は「謠

つてもようござんす。」と應じた。

それから二人して「東北」を謠つた。

よほど以前に習つただけで、殆ど復

習といふことをやらないから、とこ

ろどころ甚だ曖昧である。その上、我



夏 目 漱 石

曖昧
はつきりして
ゐない。

ながらおぼつかない聲が出た。漸く謠つてしまふと、聽いてゐる若い連中が、申し合はせたやうに、自分をまづいといひだした。中にもフロックは、「あなたの聲はひよろひよろしてゐる。」といつた。この連中は、元來謠の「う」の字も心得ないものどもである。だから虚子と自

素人
専門外の人。

分との優劣は、とてもわからないだらうと思つてゐた。しかし、批評をされて見ると、素人でも理の當然なところだから、已むを得ない。ばかをいへ。」といふ勇氣も出なかつた。

所望
のぞむ。

斬新
眼新しい。

紋服
紋附の着物。

すると虚子が、近來鼓を習つてゐるといふ話を始めた。謠の「う」の字も知らない連中が、「二つ打つて御覽なさい。是非お聞かせなさい。」と所望してゐる。虚子は自分に、「ぢや、あなた謠つて下さい。」と依頼した。これは囃の何物たるを知らない自分に取つては、迷惑でもあつたが、また斬新といふ興味もあつた。謠ひませう。」と引受けた。虚子は車夫を走らして、鼓を取寄せた。鼓がくると、臺所から七輪を持つて來さして、かんかんいふ炭火の上で、鼓の皮をあぶり始めた。みんな驚いて見てゐる。自分もこの猛烈なあぶり方には驚いた。「大丈夫ですか。」と尋ねたら、「え、大丈夫です。」と答へながら、指の先で張切つた皮の上を、「かん」と弾いた。ちよつと好い音がした。もういいでせう。」と七輪から卸して、鼓の緒を締めにかゝつた。紋服の男が赤い緒をい

ぢくつてゐるところが、何となく品がよい。今度はみんな感心して見てゐる。

萎靡
内循
氣勢が鈍つて
ぐづぐづする。

領承
承諾する。

虚子はやがて羽織を脱いだ。さうして鼓を抱へこんだ。自分は「少し待つてくれ。」と頼んだ。第一、彼がどこいらで鼓を打つか、見當がつかないから、ちよつと打合せをしたい。虚子は、ここで掛聲をいくつ掛けて、ここで鼓をどう打つか、おやりなさいと、懇に説明してくれた。自分にはとても呑みこめない。けれども、合點の行くまで研究してゐれば、二三時間はかゝる。已むを得ず、好い加減に領承した。そこで「羽衣」の曲を謠ひだした。「春霞たなびきにけり。」と半行ほどくるうちに、どうも出が好くなかつた。後悔し始めた。甚だ無勢力である。けれども途中から急に振ひだしては、總體の調子が崩れるから、萎靡因循のまゝ、少し押して行くと、虚子がやにはに大きな掛聲を掛けて、鼓を「かん」と一つ打つた。

自分は虚子がかう猛烈に來ようとは、夢にも豫期してゐなかつ

悠長
ゆつくりして
ゐる。

威嚇す
おどかす。

た。元來が優美な、悠長なものとはばかり考へてゐた掛聲は、まるで眞
劍勝負のそののやうに、自分の鼓膜を動かした。自分の謠は、この掛
聲で二三度波を打つた。それが漸く静まりかけた時に、虚子がまた
腹一杯に横合から威嚇した。自分の聲は威嚇されるたびに、よろよ
ろする。さうして小さくなる。暫くすると、聞いてゐるものがくすく
す笑ひだした。自分も内心からばかばかしくなつた。その時フロツ
クが眞先に立つて、どつと吹出した。自分も調子につれて、一緒に吹
出した。

それから散々な批評を受けた。中にもフロツクのは最も皮肉で
あつた。虚子は微笑しながら、仕方なしに、自分の鼓に自分の謠を合
はせて、めでたく謠ひ納めた。やがて、まだ廻らなければならぬ所
があるといつて、車に乗つて歸つて行つた。

—漱石全集—

謠ひ納める
終まで謠ふ。
(一)大正十四年漱
石全集刊行會
發行

二一 祖先を崇び家名を重んず

祭政一致

社會學上から上代の我が國家を見れば、所謂神祇政治で
あつた。即ち祭政一致の状態で、治者は神祇、上も神もひとし
くカミであつた。政治は即ち祭祀で、ひとしくマツリゴトで
あつた。また一方から見れば宗族政治で、宗家が分家を支配
したものであつた。公は即ち大家おほやけであつた。かういふことは
強ち我が國に限つたことではない。原始社會にはいくらかも
類例のあることである。たゞそれが太古から今日まで持續
し來つて、立憲政治の今日まで残つて居るといふことが、甚
だ珍しいのである。社會進化論の上に一特例を成したもの
といつて宜しい。支那の文明を吸収し、印度の教義を採用し
て、神儒佛合體で國家を治めるといふ聖徳太子の方針で、今

(一)第三十一代用
明天皇の皇太
子。御名は厩
戸。推古天皇
の二十九年
二月二十八日
薨御年四十
九。

軋轢
民主主義

濶歩す

仰慕す

神話

日までの變遷をなして來たに拘らず、この太古の政體に伴なふところのカミ、オホヤケに對する尊崇心、敬虔の心即ちマゴコロを今日まで少しも失はず、それで何等の争亂もなく、軋轢もなく、更に西洋の民主主義を入れて、立憲政體を爲し得たといふのが、おもしろいところである。この昔ながらの國體で、今日の世界の間に濶歩して行けるといふのが、我が國民の強みである。

さてこの神祇政治、宗族政治の根本となつて居るものは、いふまでもなく祖先崇拜であつて、祖先の功業を尊崇してこれを畏敬し、これを仰慕する念がなければ、固よりこのやうな政體の成立つ所以がない。神話の神々は、一方に於ては

自然現象を代表されると同時に、一方では祖先の大功業者たる人々と一致されたのである。天照大神は日神、月讀命は月神、素戔鳴神は恐らくは嵐の神であらうが、これと同時に、我が民族の中で、殊に優れた尊むべき方々であつたに相違ない。かういふ祖先の人々を祭つて御祭をするといふこと、即ち共同の祖先を崇奉して、そこに一致團結の政治が行はれるといふことが、神祇政治、宗族政治の本體である。天照大神が八咫鏡を天孫に下されて、これを視ること吾を見るが如くせよ。」と仰せられたのは、祖先崇拜といふことを明らか

繼承

であるのである。それであるから、皇位の繼承には、三種の神器が最も大切なものになつて居る。語を換へていへば、我が國體上からは、どうしても祖先崇拜といふことを忘れてはならぬのである。

祖先崇拜は支那人にもあるが、支那などの革命の國では、これが國家と結びついては何の意味をもなさぬ。ローマやギリシヤにもあつたが、今は跡方もない。日本では昔の神祇政治、宗族政治の政體が今日まで連續して居るから、祖廟を尊みこれを祭ることは、大昔から今日まで、政治とは離れられぬ關係をもつて居る。神武天皇が御即位式に神籬ひまきを鳥見山(一)に作つて、祖宗をお祭りなされたのは、即ちこれが爲であ

祖廟

[Greece,
(希臘)]

神籬

(一)大和國磯城郡
外山うへやまにあると
いふ。

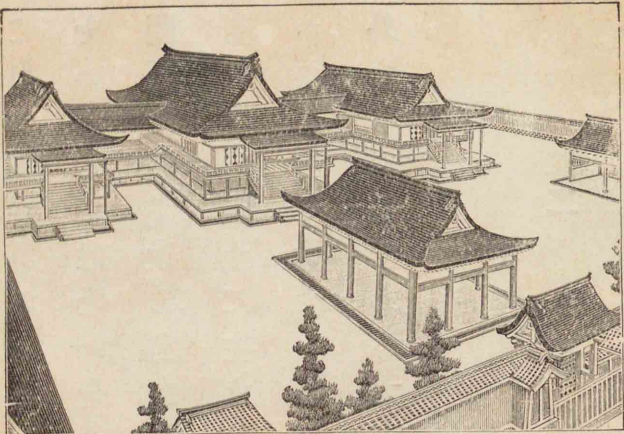
鳥見山

伊藤龍涯筆



(一)文武天皇の時
定められた。

宣戰
講和



と同時に参拜を仰せつけられるのも、この政體の上からの

る今日でも毎年一月四日の政始には、先奏、伊勢神宮之事こと

宮中三殿 (神殿) 賢所 (皇靈殿)

いふことがあるが、これは大寶令(一)時代からの定まりで、これを以て單に昔からの習慣と見るのは間違である。今日でも國家的意味のあることである。宣戰講和の詔勅を發し給ふ時に、神宮にお告げになるのも、その意味からである。宮中に賢所があつて、海外へ出向く人、または歸朝した人などが、拜謁

意味をもつて居る。日本は神國なり。」と昔から人のいふのはこれが爲である。神といつても、後世に發達した各派の神道をいふのではない。全く宗教を離れての問題である。信仰の問題たる宗教の自由といふことには、何等の關係がない。苟も日本の國土に生まれて、日本の臣民たるものは、カミとオホヤケとに對する眞心から、祖宗の靈を尊むといふ次第に外ならぬのである。太古からの國體に伴なつたことである。

二二 ぶじの山

ぶじの山夢に見るこそ果報なれ

綱屋貞柳

(一)大阪の人。本名榎並善八。本名榎並善八。油煙齋と號した。享保二十五年(一七四〇年)歿。年八十。

果報

(一)幕臣。本名大田。南畝と號した。文政六年(一八二三年)歿。年七十。

ほととぎす
鳴つるかけ
は見えねと
もきいた證
據は有明の
月
蜀山人

(二)江戸の人。本名石川雅望。天保元年(一八三〇年)歿。年七十八。
(三)江戸の人。本名久須美孫兵衛。文化七年(一八〇〇年)歿。年七十七。



蹟筆良赤方四

路銀もいらす

くたびれもせず

A(一) 四方赤良

さわらびが握拳

をふり上げて

山の横面はる風ぞ吹く

ほととぎすなきつる

あとにあきれたる

後徳大寺の有明のかほ

B(二) 宿屋飯盛

歌詠は下手こそよけれ天地の

動き出してはたまるものは

C(三) 大屋裏住

(一)江戸幕臣。本名山崎景貫。寛政十二年(一八〇〇年)歿。年六十三。

納涼
すしは
新しき
たれ妻
留守に
見の
る月

(二)江戸の人。本名北川嘉兵衛。狂歌堂と號し。年(一八四二年)歿。年七十九。

(三)江戸の人。本名安家の土。本名小島源之助。享和二年(一八二二年)歿。年六十。

うぐひすも蛙もおなじ歌なかま

經よむもあり歌よむもあり

朱樂管江

天の原月すむ秋をま二つに

ふりわけ見ればちやうど仲磨

納涼

すしは新しき
たれ妻留守に
見のる月

唐衣橘洲筆蹟

あらそはぬ風の柳の絲にこそ

勘忍ぶくろ縫ふべかりけれ

唐衣橘洲

菜もなき膳にあはれは知られけり

しぎやき茄子の秋のゆふぐれ

平秩東作

ゆく春を思ひきれとや舞臺から

飛んで見せたる清水のはな

つむり光

ほととぎす自由自在にきく里は

酒屋へ三里豆腐屋へ二里

木端

世の中をなんのへちまと思へども

ぶらりとしてはくらされもせず

馬場金埒

ゆきならばいくら酒手をねだられん

花のふゞきの志賀の山ごえ

(一)江戸の儒者。本名立松懐之。東蒙と號した。寛政元年(一八一九年)歿。年六十四。

(二)京都清水寺。

(三)江戸の人。本名岸字右衛門。寛政八年(一八二六年)歿。年七十。

(四)江戸の狂歌師。

(五)江戸の狂歌師。俗に大阪屋甚兵衛文化屋四年(一八四七年)歿。

もろこし

(一)李白、「鏡に照らし白髪を見る」の詞より出た句。空言

二三 しみすみか 石川雅望

一 白髪三千丈

學生源廣が家に童あり、常に主につきて文讀むことを習ひけり。或時家のおとなに向かひていひけるは、「もろこし人はすべてあらぬいつはりごとをぞいふなる。學問の道はなかなか世に用なし。」といふ。おとな「何事のありてさはいふぞ。」と問へば、童「今ほど李太白集を讀みてはべるに、白髪三千丈といへる句あり。これ限りなき空言ならずや。」といふ。おとな「あらず。わぬしがもの學びすることの足らざれば、さる疑も出でくるなり。今大學に入りておほざうの博士の御前にて

(一)顔淵関子齋。

しれもの



石川雅望

學問して見よ。さる疑ははるけなん。抑かしこは我が日の本には優りて、國も四百餘州ありとか。さる廣き所なれば、さばかり髪長き人もあらざらんや。わぬし論語をば讀みたるべし。かの書に、顔淵鬢四間とこそ見えたれ。」といへば、童「げに。げに。」といひて、うなづきけるとか。

二 星

宮司なにがしはいみじきしれものなりけり。その子の太郎なりけるものも、親にまさりて愚かにぞ生立ちける。水無月の宵闇の頃、屋の上に登りて大空を仰ぎて、長き竿を持ちて振動かし居たり。宮司庭に涼みてありけるが、見つけて、何

いらふ

事するぞ。」と問へば、太郎「大空の星を打落すなり。」といらふ。宮司うち笑ひて、「あなをさなや。空はなほ高かるを、さる短き竿の及ぶべきかは、強ひてとり得んとならば、なほ竿の長きをえらびてせよ。」とぞいひける。

三 茗荷

田舎わたりして絹商ふもの、日暮れぬれば或家の戸をたたきて、「宿かりなん。」といへば、あけて入れけり。あるじの妻は恐しき心もちたるものにて、この旅人のつゝみの重ねなるを見て、いかでこのつゝみ忘れて行けかし、我が物にしてんと思ひて、あるじにさゝやきいへば、「茗荷を食ひたる人は、心ぼけて物わすれするものなり。」といふを聞きて、茗荷をば多

いみじ

く食はせつ。さて商人は曉の空に起出でて、立ちて行きぬ。妻は旅人の忘れたるもの見んと、寝たる所に入りて見れば、更に一つなし。食はせつる茗荷はしるしなかりけり。といへば、あるじ「いな、茗荷こそしるしありけれ。いみじきもの忘れて行きぬ。」といふ。妻、何をか忘れたる。」と問へば、「我に與ふべき糧かその錢忘れて去にけり。」といへば、妻、げに。げに。」といひて、いよゝ腹立ちけり。

四 桶屋の思案

都の端つ方に、桶を造りて賣る男あり。秋の頃風烈しく吹出でて、よろぼひたる家をうち倒し、木の枝をさへ折り裂きなどす。檜皮屋の板のはがれたるが空に飛交ふさま、さなが

よろぼふ

たむけの神

らたむけの神に幣參らする心地す。桶づくり妻に向かひて、
 「我が家たからに富むべき時來ぬ。疾く神の御前にみわ、しら
 げ米奉りてよ。」といふ。妻野分烈しかりとて、家の富むべき道
 理やはある。希有のこといふ男かな。といへば、女はあさまし
 きまで、ものの心をたどり知らぬものなり。昔唐國に朱買臣^(一)
 といひし賢き人、我が身今に成出でなんといひけるを、その
 妻の聞きも入れて、終に別れけるが、程なく夫はいみじき位
 を得たりけるを悔みつる例もぞある。すべて男のいへるこ
 とを、悔りざまにもてなせば、よきことはあらじ。といふ。妻さ
 らばかゝる風につけて、なでふよき幸がある。といへば、夫が
 いはく、「風荒く吹きぬれば、砂埃起りて人の眼に入るぞかし、

^(一)支那前漢吳の
 人。字は翁子。
 後に會稽太守
 となつた。

なでふ

いぶかる

されば眼を病む人多く出で來なん。これ喜び祝ふべきこと
 にこそ。」といふに、妻は愈いぶかりて、人の眼を病むが、いかで
 我が身の幸とはなる。」と問へば、夫深くものの心たどらざる
 人は、その由をえ知らじ。目を煩ふ人多ければ、ようせずば目
 潰れて、かたはとなりぬべし。さるかたはになりなば、法師と
 こそなるべけれ。盲法師は近き世に唐國より渡したる三絃
 といふものを弾きて、なりはひとすなり。さらば三絃世の中
 に行はれぬべし。これ我が爲によき幸の來れるなり。」といへ



石川雅望筆

ありとある

こゝら

ば妻、しか三絃の世にはやり行くとも、身の幸となるべうもなし。」といふ。夫、そも三絃は、ねこまの皮もて作るなり。三絃のはやり行かば、世にありとあるねこまの限り殺されて、たね盡きぬべし。これよき幸のま近く來れるなり。」といふを、なほいぶかりて問へば、「ねこま死にたえなば、鼠時を得てはびこり、厨の棚、座敷をいはず、こゝらの鼠ほこり騒ぎよるづの桶ども皆食破り、或は投落して碎き損ひつべし。さらば我が家に商物の數まさりて、富み榮ゆべきものぞ。」と、手打ちたゝきて、躍り喜びけり。深きたどりある桶だくみにぞありける。

—しみのすみか物語—

二四 雪

朝ぼらけ有明の月と見るまでに

よし野の里にふれるしら雪

これは降積んだ雪を朝戸開けて月と見まがつたのである。降積んだ雪も美しいが、大空を傾けて盛に降りしきる雪景色は、月には見られぬ眺である。雪似鶯毛飛散亂。人被鶴氅立徘徊。と白樂天は歌つた。銀砂を散らすやうに、玉屑を降らすやうに見てゐる中に乾坤すべて一白。冰山峨々たる北國の地では、おもしろいよりは寧ろ凄じい景色であらうが、我が國の秀麗な山川を降埋める變化の奇觀は、芭蕉翁でなくても、

(一)古今集、坂上人一首にもある。

大空を傾ける

(二)支那中唐の詩人。名は居易。號は香山居士。大中元年(西曆八四七年)歿。乾坤すべて一白。

(三)徳川時代の俳人。姓は松尾。元禄七年(西曆一六九二年)歿。

(一)新古今集、藤原定家の歌

(二)大和國(奈良縣)山邊郡三輪の渡

(三)「世を捨てて身はなきものと思へども、雪の降る日は寒くこそあれ。」(作者不詳)

(四)名は信友。磐城國(福島縣)平藩主。享保十七年(一七三二年)歿。年六十二。往還す

いざさらば雪見に轉ぶところまで
の感を起す。さはいへ

こま止めて袖うち拂ふかげもなし

佐野のわたりの雪のゆふ暮

には寂しい感がある。雪の降る日は寒くこそあれ。雪の風流は稍、冷たいものである。川柳子は

雪見にはばかと氣の附くところまで

といつた。

安藤冠里は大名で、俳句の達人であつた。雪の朝、酒屋の小僧が跣で街上を往還するのを見て、

雪の日やあれも人の子樽ひろひ

食ふに魚あり出づるに
興あり
仁恕の道

(一)江戸淺草に住んでゐた。妻の名はとめ

みやび

暖衣飽食、食ふに魚あり、出づるに興ある大名の身分として、下を憐むこの心がなくてはならぬ。風流も仁恕の道に合しなければならぬ。

同じく俳人の西島(二)といふ人、夕方から降りしきる雪の景色のおもしろさに、いざ雪見に出かけようと、丁稚に供を命じた。西島の妻は、風流の心ある人には、雪見もおもしろからうが、みやびを知らぬ丁稚の身にとつては、どれほどつらからう。自分の子ならば、よも供にはつれられまい。」と、

我が子なら供にはやらじ夜の雪

西島手を拍つて、「この名句を得たれば、けふの雪見は十分である。もはや出かけるには及ばぬ。」といつたとは、この妻にし

(一)第六十代醍醐天皇。
(二)撰者不詳。昔からの傳説を集めた書。
(三)第六十六代。

てこの夫、かくてこそ風流の眞意を知つたものといつてよ
ゝ。

むかし延喜の帝は、雪の降つた寒夜に御衣を脱がせられ
て、聊か民の苦を思ひやる。と仰せられた。古事談には一條天
皇にも同じ話を傳へて居る。この仁慈の御行は、よく臣民を
感泣せしめるに足りる。昭憲皇太后の御歌に、

あや錦とり重ねても思ふかな

寒さおほはん袖もなき身を

仁愛の御心は同じである。

二五 樹木の言葉

島崎藤村

棕櫚しほ とうとう春の雪が來た。

躑躅 けさ私が眼を覺したら、私は身動きすることもし
きなかつた。何も見る事ができないくらいだつた。私はす
つかり雪の中に埋められてゐた。

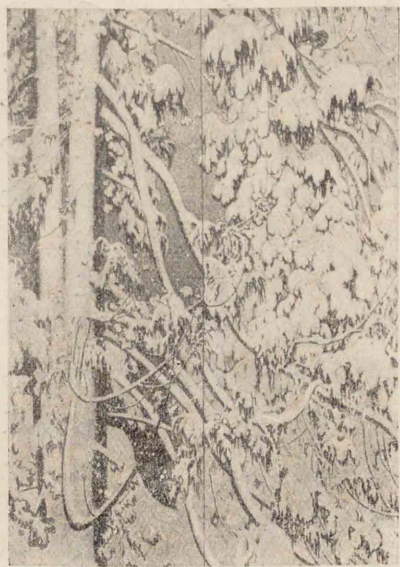
棕櫚 お前はそこにじつとしやがんでゐたのか。ゆふへ
この雪が來た時の静かさといつたらなかつた。音一つしな
かつた。あの静かさの中で、私もお前も深く埋められて行つ
た。見る間にお前は眞白になつた。私の葉の上にも重いやつ
が積りに積つてゐたが、そのうちに眠くなつて來た。

躑躅 深い雪が來たものだ。

棕櫚 お前もさう思ふのか。山へはもう初雪が來たと聞

(一) 埼玉縣秩父郡
つての西部に連な
る山々

いた時に、私たちは今日あることを豫期してゐた。あの秩父の山の頂がそろそろ白くなるといふ頃から、私たちが待受けてゐたのもこの雪だ。でも、こんな雪がやつて来て見ると、



雪 (筆 瑤 光 崎 石)

全く思ひがけないやうな気がする。今更のやうに、私は自然の威嚴に打たれる。御覽、あの石垣の側に背ばかりひよろ長く伸びた槇の枝が折れた。私はけさ目を覺してあれを見た時に、他事とは思へなかつた。細い山茶花の幹などは弓狀に曲つてゐた。八手も葉を擴げて大きな

顔をしてゐたが、もう少しで私はあの木が根から倒れるかと思つた。何しろ威勢のいい竹の藪でさへ、草のやうに寝るのだもの。

棕櫚 雪が来てからもう三日目になるをと、ひの晩はまた寒い雪混りの雨が来た。さういへば、お前もゆふへの恐しい音を聞いたらう。あの屋根から雪の落ちる音を聞いたらう。私はこの庭の隅で、一晚中あの恐しい音を聞いてゐた。躑躅 あれは唾でも崩れるかと思ふやうな音だつた。雪の積つたのが屋根から崩れ落ちるたびに、恐しい地響がした。一つの音が絶えたかと思ふと、また他の音が續いた。どう

かすると、私は遠い山の上の方の雪崩でも聞いてゐるやうな気がした。

棕櫚 若しこんな雪が一晩に四尺も五尺も降積るとしたら、どんなものだらう。その積つた上にまた積つたやつが、一冬の間も溶けずにあるとしたら、どんなものだらう。しかしこの雪は、北國地方へくる雪でもなく、信濃あたりの山へくる雪でもなく、やはりどうしても春先の武藏野へくる雪だ。

躑躅 屋根から雪の落ちる音を聞いてゐると、餘計にそんな気がした深夜の空氣の中で、あの恐い音を聞いた時の心持は、何ともいへなかつた。

棕櫚 お前はあの音の中に何か聞きつけたか。

躑躅 やがてもう私たちの所へも春がやつてくる。さう思ひながら、私は小さくなつて聞いてゐた。

棕櫚 さうだ。さうだ。雪が来て、反つて私たちは自分等の内部にあるものを引出されたやうな気がする。—— 私たちの發芽力をも、私たちの反撥力をも。御覽、私は、この私はこの團扇のやうな形した大きな葉の上の雪を、あらかた振り落した。

躑躅 お蔭で、お前の葉から落ちてくる雪は、この私がみんな引受けてしまつた。何しろお前はそんなに背が高いのだもの。

棕櫚 それは私も思はないではなかつた。私はお前に背負はせるつもりもなく、自分の雪まで背負はせてしまつた。しかし、どうすることもできなかつた。たゞたゞ私は重いものを振り落さうとする勢に驅られた。お前の背負つてゐる雪は、今そんなに重荷なのか。お前にはその雪を撥ねのける力もないのか。

躑躅 私はお前と違つて、この通り背の低いことを思つて見てくれ。私の側にある石でも、僅かに頭だけ持ちあげてゐる蘭でも、まだみんな雪の中だ。この周圍にあるものを置いて、今が今、私には起上れさうもない。しかし時がくれば、私も重い雪を撥ねのけずには置かない。この私の細い小さな

枝に案外な力の出ることは、お前も知つてゐる。

棕櫚 雪が来て反つて力を増したものは私たちばかりではない。私はこの庭の隅の位置から、隣家の檜の枝を望むこともできる。雪に濡れた檜の葉。不思議な自然は私たちの氣のつかない所に、何ほどの輝きを置くことか。あの深い光澤のある緑葉からは、最早春の焔が流れて來てゐるやうに見える。

—藤村パンフレット—

雪と霰〔自修文〕

薄田泣菫

朝から曇つた空が、午過ひるすまになつて少し明るくなつたと思ふと、日光がちらちらと笑ひだしました。何よりも日光の好きな私は、それを見るときたまらなくなつて、外套も着ないで、いきなり外へ出かけ

いくらか云々
地面のありさまを人にみたくていふ

作物
製作したもの
多く小説、戯曲、詩、繪画、彫刻など
作家
小説家、戯曲家、詩人など

觸手
下等動物がものをさすのに用ひるもので、人間の手のやうなもの

ました。

菜つ葉といふ菜つ葉をすつかり引つこぬかれてしまつた野菜畑は、その跡を百姓の手で綺麗に耕されて、いくらか疲れたらしい細かなざらざらした肌に、日光と寒さを腹一杯吸ひこみながら、靜かに次の日の種子蒔を待つてゐます。私はそれを見ると、一つの作物を骨を折つて書上げたその疲が、まだすつかりとれきれないのに、もう次の作物をはらまうとしてゐる作家の心の饒けさと悲しさを、思はずにはゐられませんでした。

私は葉の落ちつくした一本の櫟の幹によりかゝりました。日光がふるへながら私の羽織の上をはつてゐるのが、はつきりと背に感じられました。私は冬から春先へかけての日光が好きです。光が蟲のやうに鋭敏な觸手をもつてゐるのが感じられるのもこの頃です。光が焼パンのやうなこんがりした匂をもつてゐるのが感じられるのもこの頃です。光が少女の首筋のやうに細かい産毛をも

つてゐるのが感じられるのもこの頃です。さうした感じは、太陽そのものが、足の裏の柔かい生物でもあるかのやうな親みを抱かせます。私は背を樹にもたせかけたまま、この生物のやうな日光のするがまゝに身體をまかせて、ぼんやりしてゐました。

急に首筋が寒くなつたので氣がつくと、太陽はいつのまにか隠れてしまつて、曇つた空からは、細かい粉雪がちらちらと落ちて來ました。

「また雪か。」

私は口の中でつぶやきながら、急いでそこを立去らうとして、すぐ目の前に不思議なものを見つけたので、またもとのやうに、身體を樹の幹にもたせかけました。それは外でもない、野菜畑の中にあるはねつるべのてつべんに、一羽の小鳥が止つてゐて、雪の降る空をじつと見上げてゐる、その眼つきです。鳥はふだんの臆病と細心とに似合はず、すぐ近くに私が立つてゐるのに氣がつかず、氣がつ

細心
注意ぶかい心。

表情
心情が顔や身
ぶりにあらは
れたさま。

いても、そんなことには頓着してゐられないといった風に、一心になつて、じつと雪の降る空の深みを見入つてゐます。
「何をあんなに見入つてゐるのだらう。」
私はそれを考へずにはゐられませんでしたが、喜といふでもなければ、小鳥によく見る悲しい表情でもありません。
「ことによつたら小鳥め、生まれて始めて冬を越すので、雪の降るのが不思議でたまらないのぢやなからうか。」
私はそんなことを思つて見ました。

霰が降りだしました。

一つ一つ空から投げつけられたやうに飛んで来て、屋根にぶつかり、二つ三つとんぼがへりをして、勢よく植込のなかへ轉がり落ちて行く容子は、子供の時と同じやうに、今もおもしろいと思ひますが、霰のほんたうな興味は、明障子をたてきつて、薄暗い一室に閉

明障子
普通のしやうじのこと。

(一)足利第一代の
將軍。室町に
幕府を開いた。
北山殿
金閣のこと。
對屋造
中央に世屋が
あつて、それ
から東西へ建
てだした家。
清涼殿
昔天皇が政を
とられた御殿。
ほくそ笑む
よろこんでほ
くほく笑ふ。
孫庇
母屋のひさし
し。そへたひさ
し。
趣向
しくみ。

籠りながら、軒の板庇にはらつくその音にはつと聞耳を立てるところにあるやうです。

昔足利義滿の北山殿は對屋造でしたが、軒が狭いといふので、庇の外にまた庇をかけさせたことがありました。すると義滿はそれを見て、

「ちやうど清涼殿にゐるやうな氣持ぢや。この冬が待たれる。」

といつて、ほくそ笑んださうです。清涼殿には檜皮葺の庇の外に、孫庇として今一つの板庇が添へてありました。秋から冬にかけて時雨が降る頃になつても、檜皮葺だと雨がそのまゝ、そつと音もなく浸みこみますが、板庇だと時雨の音が聞かれるので、それを味はふ爲の趣向だと言傳へられてゐます。

私の郷里の家は、見る影もない小家ですが、それでも祖父も父もが風雅の心があつただけに、家の内が暗くなるのを厭はないで、軒にはわざわざ板造の孫庇をかけてゐました。冬が来て、冷たい時

雨がはらつく頃になると、この板庇はひどく敏感で、薄暗い部屋のなかで火燧にもぐつてゐる私たちの耳に、心に、いち早く雨の音を傳へたものでした。

小石を叩きつけるやうな甲高かんたかな氣ぜはしい霰の音を板庇で聽くのは、少し騒々し過ぎて、冬の靜かな境地を、いくらか脅されるやうな氣持がしないこともありませんが、しかし、それもまた興味のあるものです。

二六 本多重次

新井白石

去にし
(一) 徳川家康

去にし天正十三年三月に、徳川殿御背中に疔(一)といふもの出で来て、すでに危く見えさせ給ひしかば、内外の醫療術をつくしけれどもその驗しんなく、たゞ弱りに弱らせ給ひ、自らも

宗徒

祈らぬ神佛
もなく立て
ぬ願もなし

これまでと思し召しけるにや、宗徒の御家人等召集めて、御後の事ども仰せ置かる。人々の周章いふに及ばず、平民、百姓などに至るまで、その程々に隨ひて、祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。

手を束ぬ

腫物

本多重次御枕に取りつき、泣く泣く申しけるは、殿も定めて覚えさせ給ひなん。重次が昔この病を受けしに、立所に驗得し良醫の候。彼を召して見せ試み給ふべし。と申す。諸醫すでに手を束ね、家康また死を決す。この上醫療そのせんなし。かつは命を惜しむに似たり。とて用ひ給はず。重次大いに怒つて、かほど大事の腫物、軽々しく思し召し侮つて、事急なるに臨めばこそ、諸醫も術盡きぬれ。それにまた良醫して治

あつたらし
き命

せしめまゐらせんとするを用ひ給はで失せ給はんこと、御心がらとはいひながら、あつたらしき命かな。諸醫術盡きぬと申す上は、彼等いかでか治しまゐらすべき。年老いたる重次が、御跡にさがつて御供かなふべからず。さらば御先へ参らん。」とて、御前を罷り立つ。

殿ばら
えこそ止め
ね
さも候

徳川殿大いに驚かせ給ひ、「あれ止めよ。」と仰せければ、近く侍ふ人々走り出で引止め、仰せらるべき旨あらせられ候。」といふ。重次大いに聲を怒らして、最後の暇乞ひて罷り申すものを、見苦しい殿ばらの止めやうや。」と罵つて出でんとす。「されば候。その人を止めよとの御使が、えこそ止めねと申せとは、おとなしくも候はぬ本多殿。」といはれて、げにさも候。」とて、

御前に参る。

徳川殿、汝はものに狂ひてかくはいふか。家康未だ死しはてぬに、たとひ家康が命終るとも、汝等が世にあらんを頼みにこそ死すべけれ。また汝等もいかにもして、一日も世に残りて、若きものどもおきてして、我が家の絶えざらんやうを計らんとは思はずして、せんなき死の供せんとすることやある。」と仰せければ、「いやいや、それは人によつてのことに候。重次も今少し年だに若く候はんには、仰までも候はず、犬死せん人の御供、そのせんなし。重次若年の昔より、ここかしこの軍に従つて、眼射られ、指落され、足切られて、負はぬ手も候はず。人のかたはといふほどのかたはは、重次が身一つに集

負はぬ手も
候はず

〔一〕北條氏直。

はかばかし
き

踵を旋らす
べからず

譜第

〔二〕武田勝頼。

りて、世に交らんことかなふべき身ならず。殿の御情深ければこそ、當家にては人に恐れも敬はれも仕れ。殿の亡くならせ給ひなば、他人までも候ふまじ、まづ御聲の北條殿、我が國を取らんとし給はん。に、若き人々が、行末久しう仕へんと頼みきつたる主に、忽ち別れて氣おくれし、はかばかしき矢の一筋をも射出すことかなふべからず。當家亡されんこと、また踵を旋らすべからず。重次それまでながらへて、あの年寄りたるかたはものは、徳川殿の譜第にて何がしといはれし家人なるが、いかに惜しき命なれば、かく世には耻をさらすらんと、後指さ、れんこと、老の耻何事かこれに過ぎ候ふべき。この比までも、武田の家人等御當家に召されて、さらぬ

人にも手を束ね、膝を屈めしを、世にも哀に思ひしが、今はこの老人めが身の上になつて候と存ずれば、殿に後れまゐらせんが悲しきばかりにも候はず。我が身のはてもあさましきに、まづ御先に死することにて候。と申す。汝がいふところことわり至極せり。さらば醫療のことは汝が心に任すべし。天命すでに至りて家康空しくならんとも、汝もまた家康が心に任せ、いかなる耻を見つべくとも、一日も生残りて、後のことよきに計らふべしと存ずるや否や。と仰せければ、重次が申す旨に任せられんには、重次いかでまた仰を背きまゐらすべき。と申す。さらば醫師召させよ。とて召さる。醫師やがて参りて、御灸治よろしかるべし。と申せば、重次

もぐさ取つてすう。御灸の痛み覚えさせ給はねば、もぐさを増し加ふること多くして、後いさゝか痛ませ給ふ由仰せければ、御薬をつけてまゐらせ、お薬湯をも進め奉りしに、その夜の半ばに御腫物潰れて、膿血夥しう流れ出で、御惱立所に輕ませ給へば、重次は嬉泣に聲を限りに泣く。御前伺候の人も、感涙を共に流しけり。この人かゝる奉公のことども、世に傳ふること多し。悉く記すに暇あらず。大略を記すのみ。

—藩翰譜—

二七 土器賣る翁

柳澤 淇園

土偶人

伏見より年七十歳許なる老翁、土偶人、土器のたぐひを擔

ひて、洛中を賣りありくあり。常に商ふ家に来りて食事をするをりから、その家の奉公人大勢集り、かの翁にいひけるは、「御身の擔ひたるものは、その價いかほどばかりの品にか。」と問へば、翁答へて、「銀十五六匁ほどの荷なるべし。」といふ。また問ふ、「京の町は人のゆきかひ繁き所にて、若し過ちて皆碎くまじきものにもあらず。さやうの時はいかがする。」といへば、「それこそ過なれば、さることなしとはいふべからず。さある時は、そのことをありのまゝに陳べて、我等も年久しく商ふなれば、一荷くらゐは情にて借受けて商ひ申すなり。」といふ。また問ふ、「その上にもまた碎くまじきものにもあらず。その時はまたいかがする。」と詰りいへば、「いかに問屋なりとて、數

無心
その許たち

度の無心もいひ難ければ、そのをりこそその許たちの如く、
奉公なりともいたすより外にせんかたなし」といへり。

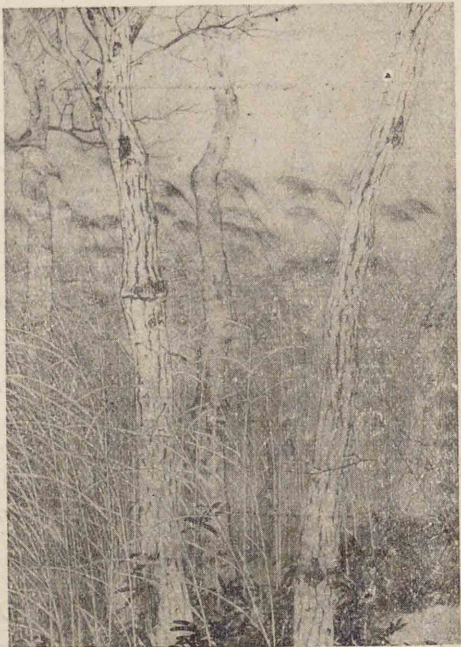
—雲萍雜志—

二八 武藏野の二月

中西 悟堂

二月となると、武藏野の風景は荒涼とした趣を呈して
くる。廣い平野のそここに斷續してゐる雜木林も、殆ど葉と
いふ葉を落してしまつて、幹と枝とばかりがわびしい日光
にほの白く光つてゐる。そして褐色に乾いた僅かばかりな
枯葉が、枝の尖端などでかさかさとして干からびた音を立てな
がら、風に翻つてゐる。

野の面は見る限り寂しく黒土を現してゐる。なんにもな
い田には、鳥の群が餌を漁つてゐる。麥畑の麥も二寸ほどし



(筆郎太徳森藤) 野藏武の枯冬

か伸びてゐない。あと
はところどころに霜
除の藁を施した葱の
畑や、枝を結び合はし
た桑の畑があるばか
りである。

この一望寂寥な野
の上を、木枯ばかりが、赤兒の泣聲のやうな聲を立てて荒廻
る。二月は木枯の月だ。晴れた日には蒼い天空から天空をそ

高邁
〔關東山脉〕

れは渡つて行く。高邁な騎乗のやうに、彼はその行手を知らない。野の果に見える相模や、甲州の山脉の方から吹いて來たり、北の方から疾い速度でやつて來たりする。さういふ時には、いつも大山や丹澤山の姿がはつきりと見られる。そしてそれ等の連山の上に巍然と聳えた大屋根のやうな富士が、碧天をぬいて一入清く、白玉のやうに立派に見られるのだ。かうした山々の姿は、殆ど武藏野の到る所から眺めることができる。どの往還からも、どの林間からも、どの村路からも同じやうな構圖で見られる。木枯で洗ひ立てられた山の明朗な姿、それは日没の時のそのの莊嚴さ、曙の時のそのの清澄さと共に、武藏野の美觀だ。

戰慄す
鳴擾す

曇日の木枯。——これは晴天の日のそれと違つて、地上低く吹きまくる。樹の繁みもなくなつて、をりから遮るものもない。空白な野を、凄じい雲の流と共に走る木枯は、田の面と林とを問はずに吹きぬけて行く。さうした時、殊に悲壯な光景を見せるのは、雑木の枯林である。あらゆる幹と枝とが恐怖に打たれて、逃迷ふもののやうに戰慄し、號叫し、軋み、鳴擾する。そしてそれは一つの林と他の林とが遠く隔りながら、呼合ひ答へ合ふ悲鳴となつてしまふ。全體が搖れ狂つてゐる。あちこちの林は、落し残した褐色な枯葉の群を、花火のやうに空に舞はす。そしてまた林に籠り棲む雀や四十雀などの群が、烈しい林の騷擾に驚いて、中空へ一齊に舞立つが、木

枯に抵抗しかねて、また一團の黒いしみとなつたまゝ、枯葉の群と共に再び林に落下する。これこそ武藏野の二月が見せる激越な景物だ。

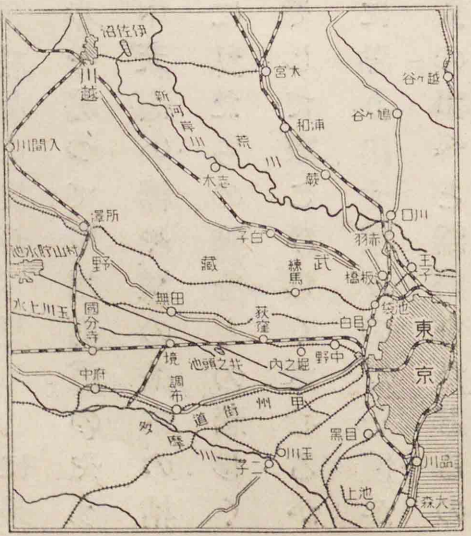
さういふ時は、また私たちは松林の奏でる調高い松風の音をも聞く。一體武藏野には雑木林と共に松林が多い。木枯の日には、それ等の松林が灰色の空にべうべうたる精悍な松籟の胡弓を弾く。それはあの喬木自身の亭々たる心を語るやうに、氣高く猛く咽せび立てる。

さて私たちは晴れた日を選んで、散策の爲に武藏野に出る。境田無、所澤あたりの林の多い所、多摩川べりの明るい野、伊佐沼あたりの曠原、どこでも氣の向く所でよい。若しもそ

精悍

- (一) 東京府北多摩郡武藏野村
- (二) 同田無町
- (三) 埼玉縣入間郡所澤町
- (四) 山梨縣丹波川郡の西郊に東京府來つて、東武村に注いで、海に注いである
- (五) 埼玉縣川越市の東郊に在る

れが非常に早い曉だつたら、綿のやうな朝靄の剥げるにつれて、その下から白妙の、そして薄紫にさへ見える渺茫とした霜の景色を私たちは見る。畑、丘、河岸、田のすべてを蔽うて幾里も續く霜、そして更に太陽が野末に現れる刹那に、それが一様に寶石のやうにかゝよひわたるのを見る。それから後は霜解の始らぬ前、午前八時か九時に至るまでの間を、畑や川べりを選んで歩きながら、思ひきり凜とした朝の空氣を樂しむがいい。林の中を歩くなら、枯



葉や落葉の露と霜とが乾いてしまつた午後の方がいい。そしてそれはまた日没を見る爲にもよいのである。西の空に血潮を吹くやうな日没の光景は、枯林の間から見る時に最も莊嚴である。かくて一日の散歩を終つて、甲州街道のやうな街道に出るなら、道の両側の中天高い樺や、椴の並木の梢にまつはる夕靄の匂が、どんなに私たちの胸をも悲しくさせ、人懐こくさせ、優しくさせ、そして家こひしくさせるか知れない。ぼつぼつと夕暮の中に點り出す家々の灯を懐かしみながら、私たちは楽しい晚餐の家へと歸路をたどるのである。

雪に埋る竹林の藪、柑子や、垣根の南天のつぶら實、月に流



(筆聲有水清)

れる梅の花の素香、霜深い朝の村落の焚火、枯枝が針と刺さる夜空にきらめく美しい星座、稀に聞くことのできる雪の夜の狐の聲、水の涸れた小川の石だたみ春を飛交ふ鶺鴒と、この季節のものはいろいろあるが、ともかくも二月の武藏野は、凋落の武藏野であり、春への忍耐の爲の謹直な武藏野である。そして私たちがその風景と地平線とから學ぶものは、嚴肅と、謹直と、敬虔と、凜とした氣品と、眞實との自然の深い教訓である。

二九 春を待つ歌

北風のすきぶがまゝに、
野も山もうらさびたれど、
草木や、芽はふくらみて、
あたゝかき光を待てり。

ひねもす

ひねもすに口をつぐみて、
鶯は谷にこもれど、
笹かげに空をうかゞひ、
巢を出づる構やすらん。

沖邊ゆく白帆も稀に、

浪の花岸に凍れど、

たちならぶ粗朶そだに青みて、
海苔の香の高きが着けり。

やがて見よ、月はおぼろに、

鳥影は夢かとうかび、

春の海静けきゆふべ、
さくら鯛をどらん近し。

かくて今春は隣れり。

雪分けて若菜も摘まん。

遠近の梅も尋ねん。

楽しきは春まつ心地。

— 高等小學讀本 —

三〇 自然の神秘

吉田絃二郎

自然の本體は愛であるといふことを信ぜずにはゐられぬ日がある。

元日から積つてゐた雪が、やつと二月の半ばになつて雨の爲に解けた。今まで雪の下に隠れてゐた地の上には、すでに小さい草の芽が、去年の枯草の間から頭を擡げかけてゐる。太陽は一刹那もその草の芽一つも忘れずに、柔かな光の中に、すべてのものを生かし伸す尊い仕事を營んでゐる。枯草の上にしやがんで、じつと小さい一つの芽を見つめてゐると自然といふものの不思議な謎の深さが、一層深く感じ

られる。たゞ黙つたまゝ、刹那刹那に伸びて行く一つの芽の神秘さに驚かずにはゐられなくなる。

日暮方、家の廻りを歩いてゐると、笹鳴を止めた鶯が、つくねんと繁みの下枝に頭をかしげてゐる。何でもないことやうではあるが、じつとその小鳥を見つめてゐると、そこにも自然の神秘、自然の無限な驚異が潜んでゐる。

この頃では、少し春らしい日には、笹鳴からほんたうの鳴音に移らうとする鶯の聲が、いかにもをかしく繁みの中で聞える。臆したやうな、はにかんだやうな鳴聲である。そうつと窺いて見ると、自分で鳴いて、自分の聲に不思議さうな眼をして、聽惚れてゐる。

蠱惑

年々同じことではあるが、ここにも自然の無際限な蠱惑がある。神秘がある。いろいろな草や花が、遽しく一刹那の小止みなしに、生まれ、活き、死んで行く姿を見つめてゐても、自然の驚異に引きつけられてしまふが、何處からとも知れず、遠く旅を續けてくるであらう渡鳥の聲を聴くと、一層自然の大きな驚異に打たれる。

殊に夏の終から秋冬にかけての小鳥の群は、自然の寂寞そのもののやうなはかなさを想はせる。百舌や懸巢のやうな悪戯な鳥でも、秋になると憎めないやうになる。四十雀、十姉妹、駒鳥、鶯、頬白といふやうな可憐な鳥が、林の中に鳴いてゐるのを見ると、自然に對する懐かしみが際限もなく涌い

てくる。頬白の頬の白いのも、ひうその胸毛の紅いのも、それが當然だといへばいはれようが、じつと見つめてゐると、自然といふものの驚異に打たれずにはゐられない。

嬰兒が言葉を覚え始めること、子供が草の中で歌を歌つてゐること、馬が道傍で秣桶の中の麥を食つてゐること、人が笑ふこと、何もかも自然の神秘であり、魅惑である。

俳句評釋〔自修文〕

沼波 瓊 音

俳句は、どうも初の中は何だかわかりにくい。てにをはが省いて、あつて、片言のやうでもあり、判じもののやうでもあり、或は謎のやうでもあるといふ感じを、誰ももつものであるが、決してさうではない。俳句は讀むべきものではなくて、味はふべきものである。理窟をさつぱり除けてしまつて、直覺的な感情を基として作りもし、味

てにをは

助詞。

片言
不完全な語。

直覺
感覺の作用で
直接に知ること

(一)京都府(山城國)愛宕郡人。芭蕉の高弟。姓は内藤。元禄十七年(一七〇八年)四月五日歿。年四十五。

(二)徳川時代の俳人。姓は小林。文政十年(一八二九年)四月十五日歿。年六十五。

はひもするものである。自分で味はふに限る。だから極端にいへば、俳句を解釋するのは無意味だともいへる。それで、ここには字句の意義などについて、一通りの解釋を試みようとするだけである。

(一) 大原や蝶の出で舞ふおぼる月

(二) 丈草

朧月夜に大原の景色を見ると、霞んでぼうつとしてゐる所へ、蝶が舞つてゐる。蝶の色も何もよく見えない。たゞ朦朧たる中にちらちら蝶が舞つてゐる姿が見えるといふ景色である。この句を芭蕉が見て、なるほどこれは佳句である。と賞めたさうである。夜蝶が出て舞つてゐるといふことが、神韻縹渺たる趣をなしてゐる。

やせ蛙まけるな一茶これにあり

(三) 一茶



一茶筆蹟

一茶は悲惨な家庭に育つたので、弱いものに大變同情をもつて

頑張る
頑固にかまへる

(一) Punch

(一) 森川許六。俳人。近江の人。正徳五年(一七二五年)歿。年六十。
土佐繪。日本畫の一派。多くは濃厚な色彩を用ひる。
(二) 向井去來。俳人。肥前の人。寶永元年(一七二四年)歿。年五十三。

短才
ちよの足りな
いこと。

ゐる。この句なども、單に滑稽のみでなく、裏面に溢れるが如き同情が見えよう。蛙合戦が始つてゐる。痩せこけた蛙が出て、非常に苦戦に陥つてゐる。そこで一茶が瘦蛙の肩をもつて、まけるな、まけるな、おれがここにゐる。といつて、頑張つてゐるところである。ちよつとしたポンチ繪のやうな有様が目に浮かぶ。何だか、一茶までが痩せた人であるらしく思はれる。

卯の花に月毛の駒の夜あけかな

(二) 許六

極彩色の土佐繪か何かのやうな景色である。活動は餘りないが、綺麗な句である。この句についてはおもしろい話がある。去來がかういふ趣向を前から考へて、句にしようと思つてゐた。ところが、有明の月にのりこむとして、後がどうも巧くつかない。月毛駒、葦毛駒としたり、の字を入れたり、いろいろ苦心しても具合がわるい。終にその句を棄てた。その後、許六が何の苦もなくこの句を作つたのを見て、自分は短才だと覺つたと自白してゐる。

(一)支那の有名な書家王羲之のこと。
 (二)大伴氏。名は政胤。大阪の人。文化二年(二四六年)歿。年八十八。
 一人よがりうぬぼれ。

凄み
 すこいさま。
 (三)和漢朗詠集にある詩句。巴峽は上流の巴子江の流にあり。五夜は午前四時。今(四)池西言水。俳人。弘長の人。享保四年(一七九三年)歿。年七十三。

白團扇隣(一)の羲之(二)に書かれけり
 大江丸(三)
 白い團扇を家に置いたら、隣家にゐた書の自慢な人が、誠に一人よがりな拙い字を書散らして行つたといふ意である。隣の羲之にといふので、嘲つた意味も、また羲之氣取の書天狗も現れてゐ、受身の書かれけりは、頼みもしないのにといふ迷惑さがこもつてゐる。

聲かれて猿の齒白し峰の月 其角

凄みを詠んだのである。この句は、巴峽秋深。五夜之哀猿叫月(三)など、よく詩にある趣から作つたのであらう。猿の齒を取立てて白いといつたところに、其角の強みが現れてゐる。

木枯のはてはありけり海の音 言水(四)

木枯が長く長く吹續いてゐる。非常な音をして吹いてゐる。そのうちに暮方にもなつたのであらうか、それがはつたり止んで、世間が静かになつた。すると、向ふの方で、どうつといふ音がする。海の音だ。波がまだ騒いでゐるんだ。さういふところを詠んだのである。

この句は、當時大層評判になつた句で、その爲に、「木枯の言水」といふ異名を附けられたといふことである。

旅に病んで夢は枯野を驅けめぐる 芭蕉

夢幻の境に彷徨(一)
 ゆめまぼろしの境を心がさまよふ。
 推敲
 詩や歌の字句を練り工夫すること。
 斯道
 この道、即ち俳諧の道。
 (一)筑波會編、沼波氏その他の評釋等を集めたもの。

芭蕉病中の吟最後の句である。芭蕉は元祿七年十月の十二日に歿したが、この句のできたのは八日である。旅行中病氣になつて、それが大變重くなり、心も確かでない、夢幻の境に彷徨うて居る、その時夢心に枯野を驅廻るやうに感ずるといふのである。重い病氣に罹つたものは、心持がむしやくしやして、ものがわからなくなつて、非常に煩悶するやうな場合に、こんな感じを経験してゐるであらう。この句、初には、枯野を廻る夢心としたが、いろいろ側にある人に相談したり、自分にも考へたりして、かう直したのである。死病の重患に苦しんでゐながらも、この最後の句を、かくも推敲して居つたとは、いかにこの詩人が斯道に忠實であつたかを示して、十分ではないか。

俳諧講演集

三一 静かな春

生田 春月

この都會では正月を過すと、春はいつでも町の花屋の花から訪れてくる。

ことしも桃色にふつくり咲いた躑躅の切花が、私の家の竹の縁に、小さい壺に挿されて置かれてから、もう十二三日くらゐも経つであらうか。

この間に一度雪が降つたので、その雪解の寒さの中で、冷え冷えとその桃色の花が忍んで咲いてゐるのを見る毎に、私の口には自ら「春遠からじ……春遠からじ……」との句が、慰めるやうにのぼつてくるのであつた。

屈託

あゝ春。ほんたうに懐かしい春。新しい爽かな裕を着ることもできるし、色褪せた冬の外套を軽い外套に取替へることもできるし、青い青い麥の畑を車窓から眺めながら、美しい川の流の上の鐵橋を渡る汽車に乗ることもできるし、どこかの山里に近い温泉宿で、ぶらぶらと二三日を屈託もなしに過すこともできる。何と思ひ浮かべても、楽しいのは春の旅ではないか。

「春し待ちなば花咲かん……」

ふとかういふ句も口に浮かんでくる。

今は事志とたがつて不遇に暮す身にも、いつかは春はやつてくるのだ。そして花の咲く日もあるのだ。

事志とたが
ふ

今に春がくる。今に花も咲く。かう思ひつゝ、忍び難いことも忍び、むづかしいことも努力努力で耐へ忍び勤勞する人の心は、何といつても素直なものではないか。

×

若いものにとつても、老人にとつても、それぞれの意味で春は待たれる。ひたすらに待たれる。

春がくれば、貧しいものも貧しいなりに快活になり、病んでゐるものも病んでゐるなりに幸福に近づくのを感じ、健かなものは健かなだけには、じけるばかりの元氣が出るのである。

この心からの春の思慕は、それがそのまま、詩の心である。

詩といふものは、もともと魂の思慕であるといつてもいいのだ。そしてその心の動きが、自分の律動にふさはしい詞を選ぶのである。

外國の書物を見ると、かういふ春への思慕が、北歐から南歐イタリーへの旅のあこがれになる。雪と氷とに埋められたロシアやスキャンデイナビヤ半島の方から、暗いイギリスから、灰色のカナダから、世界漫遊客が列をなして集つて行くのが、かの^(一)ミルテの樹は靜かに、^(二)ローレルは高く、と歌はれたイタリーの青空の下である。ギリシャ、ローマの古典的な旅である。それが日本では京都であり、奈良である。佳い春をごく少ししかもたない東京に住んでゐるものにとつては、

Scandinavia
Canada
(加奈陀)
獨語 Myrtle
(英語 Myrtle)
常緑灌木
Laurel
(月桂樹)
古典的

とゞめをさす

北歐人が南歐を思ふやうに、京都を思ひ、奈良を思ふ。

日本の春はまづ京都、奈良にとゞめをさす。

菜の花が黄色に續いてゐる大和路を、寺から寺へ、村から村へとさまよふ氣持はどんなであらう。餘りの長閑さについて眠たくなつて、どこかの丘の草の上に寝こんでしまひはしないだらうか。

青いといふよりは寧ろ黒く眠つたやうな東山三十六峰(一)から、北山、西山、淀山、(二)山崎の山々に圍まれたあの盆地に、温かい水のやうにたゞへられた春光を浴びながら、洛中、洛外の春を尋ねて名僧、隱士、美姫の遺蹟を弔ふのは、いかに心ゆく限りの逸興であらう。

(一)京都市の東に連なる山々。
(二)共に同市の西南方。

逸興

春のくる毎に思ふのは京である、奈良である。

去年の春、ちやうど花も少し盛を過ぎた時分、私は京都へ行つて、古い寺々を見まはつた。そこでは、いろいろなものが見られたし、いろいろなことが考へられた。けれど、あんまり多くを見、多くを感じたので、感情の疲勞を來して、反つて印象がぼんやりしてしまつた。

それよりも私が忘れ難く思ふのは、洛西嵯峨(一)のあたりをさまよつた一日の楽しさである。そこにも、ところどころ菜の花が青い、麥畑の間を點綴して、ありとしまない風が、ほのかに戦いで過ぎる。さすがに都ばなれのした小徑を、ぶらりぶらりと歩いたり、佇んだりして行くと、行く所に何か心に

(一)京都府(山城國)葛野郡大井川の東岸。
ありとしまない

さ、やきかける古代の面影が、花となり胡蝶となり、夢となり幻となつて、そゞろに懐古の情を募らせる。――旅ゆく一人――

三三 哲人聖德皇太子

高島米峰

哲人

私の最も崇敬する偉大な哲人を過去に求めて、私はまづ聖德太子を擧げざるを得ない。聖德太子の偉德鴻業は山の如く高く、海の如く廣く、到底筆紙のよくつくすところでないが、憲法十七條を定めて平和の理想を宣言し、この理想實現の爲には、佛教の信仰を以て國民の精神生活の根本基調とすることの切要なるを認め、更にこれに依つて、天皇中心主義を闡明して、建國の精神を振作し、また官位十二階を定

基調

闡明す

(一) 推古天皇の十一年十二月。

(二) 推古天皇の十二年四月。

人材登用
閥族跳梁

めて人材登用の門を開き、以て閥族跳梁の弊を一掃して、内政を充實し給うたので、日本の面目はここに全く一變するに至つたのである。嘗にそればかりでなく、當時世界の最大強國として、最も文化の進化した支那――支那は恐らく日本をその屬國くらゐにししか考へてゐなかつたであらうほど、それほど日本の世界的地位は低いものであつた。――と對等の國交を結ぶことになつたといふのは、實に聖德太子の偉大性の、いかに驚くべきものであるかを看取せしめられるのである。

聖德太子は推古天皇の十五年に遣隋使發遣のことを決定し給ひ、小野妹子が使節に任ぜられて、その年七月に出發

(一) 第三十三代。
(二) 近江國滋賀郡小野村に於て、小野と稱した。

(一)支那に於ける國號

冒頭

した。この年は隋の煬帝の大業三年で、妹子が煬帝に差出した國書の冒頭には、

日出づる處の天子、書を日没する處の天子に致す。恙なきや。

とあつて、實に堂々たるものであつた。從來支那は自ら中國を以て任じ、東夷、南蠻、西戎、北狄と、四方の國々を野蠻國あつるに考へてゐたので、日本の如きも所謂東夷の中の一くらいした對等な禮を以て書を贈つたので、煬帝は甚だ不快に感じ、一度はこれを却けたのである。が、しかし、これほどの國書を差出す國は、一體どのくらゐな文化をもち、國民の生活

(一)淀川の河口。

(一)磯城郡、今三輪村大字金屋の内。

がどのくらゐ進んでゐるか、ともかくもその實情を知る必要があると思つたのであらう。斐世清といふものを使者として我が國に遣すこととなり、斐世清は小野妹子と共に、翌年四月難波に着いたのである。この隋使斐世清の報告が、日本を隋と對等なものにするか、それとも依然として屬國あつかひにするかといふ最も重要なものであつたので、聖徳太子はその待遇については、頗る心をお籠めになつたらしい。まづ朝廷では飾船三十艘を以て一行を難波の江口に迎へさせ、難波の新館をその旅館に充てて、優遇到らざるなく、また彼が都に入る時には、飾騎七十五疋を以てこれを大和の海石榴市の衢に迎へ、天皇の謁を賜ふ時には、有司百官が

定められた冠位に随つて、綺羅星の如く宮廷に居並んだといふので、さすがの斐世清も、すっかり感服してしまつたらしい。その結果、彼が歸國の時、第二回遣隋使として再び小野妹子を遣ふこととなり、その時妹子の持つて行つた國書は、これもやはり聖德太子の筆に成つたもので、實に大文章であつた。さすがの隋の煬帝も、斐世清の報告やら、かうした堂堂たる二度の國書やらでも、もう否應なしに、對等な國交を結ばなければならぬことになり、随つて支那は、日本を完全な獨立國として、認めなければならなくなつたのである。これ實に聖德太子の理想の一面が、遺憾なく實現したのであつて、我が國が金甌無缺な國體を維持して今日に至り、更に

金甌無缺

その天壤と共に窮りなきを期し得られるのも、これ等に淵源するところが頗る多いのである。

聖德太子の御事業は、右に述べた外、外國文明の輸入でも、美術工藝の奨勵でも、歴史の編纂でも、憲法の創制でも、冠位の制定でも、曆法の研究でも、何一つとして偉大でないものはないが、その中でも最も重要なものは即ち天皇中心主義の徹底、最も意義あるものは即ち佛教の興隆、最も華やかなものは即ち日隋對等な國交であつて、これ私が哲人として崇敬し讚嘆し奉る所以なのである。

惟ふに日本開闢以來、皇太子で攝政の大任を帯びさせられた方は、僅かに御三方しかましまさぬ。しかも、その中の御

開闢

龜鑑

(一)第三十七代。
(二)舒明天皇の皇子。

二方が、皆二十代の青年でこの大任を帯び給うたといふことは、現代學生の最も尊い龜鑑でなくてはならない。その所謂攝政皇太子の御三方と申し上げるのは、推古天皇の攝政皇太子聖德太子、齊明天皇の攝政皇太子中大兄皇子、及び今上陛下即ち前の攝政皇太子裕仁親王殿下にましまし、聖德太子は二十歳、中大兄皇子後の天智天皇は三十歳の時に、そして私たちの敬愛し奉る前の皇太子殿下は二十一歳の時に、攝政の大任を帯びさせられることとなつたのである。聖德太子攝政の時代にも、中大兄皇子攝政の時代にも、日本が内に充實し外に躍進したといふ事實から考へ合はせて、どうしても昭和の日本もまた、我が聰明英邁にわたらせられ

る今上陛下の御威徳によつて、更に一段と内に充實し外に躍進すべきことを、確信せざるを得ないのである。

三三三 飯の味

相馬 御風

(一)大正十二年。

(一)先年の大震災の當時、暫く私の家に避難してゐた親戚の子供たちのうちの一人が、或日私の子供に向かつて、頻りに玄米の握飯のいかに旨いものであるかを話して聞かせた。するとその話にそゝられて、私の家の子供たちまでが、そのおいしい玄米の握飯を食べて見たいといひだして、私たちに大笑させたことがあつた。

玄米の握飯の旨さを話した子供にとつては、それを食べ

た時の自分の氣持が、その旨さを味ははせてくれたのだとはわからずに、玄米の握飯そのものが旨いのだとばかり思ひこんでゐるのであつた。しかし、私はその時その話に笑はせられながらも、こんなことをしみじみ思つて見た。

「いや、さうはいふものの、それがほんたうな飯の味なのであらう。家にゐる時にはとても食べる氣になれさうもないやうな乾からびた握飯でも、山登などをして食べると、たまらなく旨く感じられることは、自分たちも経験したところである。いはば、私たちは毎日飯を食べてはゐるが、そのほんたうな味を味はひ得ることが極めて稀なのだ。それにしても、なぜ私たちは毎日三度三度さうした飯の味を味はふこ

とができないのだらうか。」

それは私たちの心持が鈍つてゐるからだ。慣れると鈍る。鈍ると味がなくなる。飯ばかりでなく、自然に對しても、文明に對しても、また人に對してもそれは同じことだ。

平凡をさげすみ、嫌ひ、甚だしきは、それを詛ふやうにさへなりがちな私たちの心——それはつまり鈍つてゐるからだ。徒に變化を求めつゝ、終に何物にも満たされないやうな心——それはつまり鈍つてゐるのだ。心さへ常に新たであれば、何物のうちにも常に新たな味を味はふことができるはずだ。徒に變化をのみ求めながら、終に何物をも得ることのできない生活よりも、日々に新たな心を以て、この平凡な

生活のうちに限りなき味を味はひ得るやうな生活が眞に私たちにとつての幸福な生活でなければならぬ。童心の尊さを私たちが讚美して止まない所以もそこにあるのだ。成人の後までも幼兒の心を失はない人を最も尊しとした哲人の考も、そこにあつたのであらう。

日々に、刻々に心を新たにして生きる工夫——それを私たちは最高の修養としたいものである。

三四 造化のたくみ

土井晩翠

あゝ、うるはしき天地の
たくみをいかにたへまし。
月日めぐりて年逝きて

いくそ

かはるいくその景色ぞや。

いろふ

春の歩みの着くところ、
地に花かをり草いろひ、
はるのいぶきの行く所、
そらに蝶まひ鳥うたふ。

清きは夏のゆふ河原

涼しき眺見よやとて、

空に月照り、風そよぎ、

地に露結び、水ながる。

しぐれも雲も時めきて、

秋のゆふべの色よはた、

谿は紅葉のあやにしき、

峰は友よぶ鹿のこゑ。

時めく

冬はあしたのあけの色、
 色なき空に色ありて、
 雪のこすゑに梅薫り、
 梅のこすゑに雪かゝる。
 あゝ、いつくしき天地の
 たくみをいかにたゝへまし。
 同じひと日の空合も、
 遷るいくその眺ぞや。

— 晚翠詩集 —

改訂帝國新讀本 卷四終

大正十三年十一月二十六日
 大正十四年二月四日
 昭和二年五月十一日
 昭和三年五月二十二日
 昭和四年五月二十二日
 昭和五年五月二十二日

印刷發行
 印刷發行
 印刷發行
 印刷發行
 印刷發行
 印刷發行

(改訂帝國新讀本)

定價	
自卷一各	金四拾六錢
自卷四各	金四拾壹錢
自卷五各	金四拾壹錢
自卷八各	金參拾四錢
自卷十九各	金參拾四錢

昭和三年三月定價	
自卷一各	金七拾六錢
自卷四各	金六拾八錢
自卷五各	金六拾八錢
自卷六各	金五拾七錢
自卷十九各	金五拾七錢

編者 芳賀矢一

發行所 東京市神田區通神保町九番地 富山房

代表者 合資會社 富山房社長 坂本嘉治馬

印刷所 東京市小石川區音羽町六丁目 富山房印刷工場



發行所

東京市神田區通神保町九番地

合資會社 富山房

電話神田 二一四一・二一四二・二一四三 振替口座東京 五〇一四三

